

# やまぶた



初冬・富士写ヶ岳 (by N.Toga)

金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会会報 vol. 27

## 目 次

東海支部設立 & P W 報告 ( 設立に際して )	16 期	川端 俊朗	1
" ( 設立の経緯 )	24 期	坪井 陽典	2
" ( 御在所岳 P W )	21 期	竹本 彰	3
	26 期	益川 珠美代	4
" ( 笠置山 P W )	17 期	小島 敬・幸子	5
" ( 白草山 P W )	5 期	久島 俊也	6
関東支部と P W	18 期	横井 恒雄	8
2012 野沢温泉スキー合宿レポート	8 期	野村 孝弘	13
O B 南竜集中 P W 2012	8 期	山村 嘉一	19
再び塩見から北岳へ	6 期	合津 尚	21
日本 300 名山 西日本エリア 111 座・日本 100 名山踏破を顧みて	8 期	篠島 益夫	22
私の「登山道」	15 期	舟田 節子	28
ワングル入部 40 年、沖縄返還 40 年大人の西表島 P W ( 南海ばいかじ紀行 )	17 期	小島 敬	30
「第 86 回国展 ( 写真部門 )」入賞	7 期	村田 泰恵	34
「第 22 回日本詩人クラブ新人賞」受賞	21 期	大野 直子	35
現役生のページ			36
O B 会会計報告、小屋酒場 2012			41
編集後記			42

### 表 紙 の 言 葉 ( 梅 典 雅 )

「医王山」「大門山～高三郎山」「笈ヶ岳・大笠山」「白山」と続けたこのシリーズも最終回となった。これらの山は、以下の 3 点を意識して選んだつもりだ。

よく知られた石川県の山

平野部から望まれ、一見してそれとわかる山容の山

金大ワングル O B に馴染み深い山

さて、北から順の最後の山は、大日山か富士写ヶ岳と考えていたが、 の観点から写真は富士写ヶ岳とした次第。ただ、どちらにしても には該当しないであろう。少なくともぼくが現役の間に行われた両山の P W は、自分自身の 1 回以外に記憶がない。5 月の連休初日に九谷から真砂まで歩いて野営、2 日目に大日をピストンして我谷ダムの事務所に泊めてもらい、翌日、シャクナゲ咲く富士写ヶ岳ワンデリングという行程だったはずだ。

当時としては、“軟弱”派の P W であったに違いないが、社会人になって、週末日帰り・故郷探訪の山が増え、たまに遠出しても、ひと山登って温泉泊、翌日は車で移動して次の山といったお気楽山行の原点は、あの P W にあったのかも、と思う今日この頃である。

## ～ KUWVOB会東海支部が 設立されました～

今年、近畿支部、関東支部に続き、KUWVOB会東海支部が設立されました。4月に設立総会を開催した後、PWを何回か開催し、積極的な活動をしています。そこで「やまざと」に設立の経緯や活動内容を紹介してもらいました。

### 1. 設立について

#### KUWVOB会東海支部 設立に際して

支部代表 16期 川端 俊朗

去る4月14日、KUWVOB会東海支部を設立いたしました。同日は、名古屋市で34名のOB諸氏の参加をもって、設立総会が開催されました。

ここで設立に至る経緯を簡単にご紹介します。私事ながら、小生は大学卒業後、名古屋で暮らしており、15年ほど前に12期～17期のOB諸氏10名程度で交流会を行ったことがありました。しかし、勤め人の定めというか、50歳を迎えた年に大阪へ、その後東京へと転勤、計9年間の単身赴任を強いられました。しかしながら、幸いにして、赴任地でワングル近畿支部、関東支部の皆さんに仲間に加えていただき、山行きや飲み会に参加、一人暮らしの身には得難い、大変楽しいひと時を与えていただきました。

昨秋に定年を迎えて、ようやく名古屋に帰ってまいりましたが、東京での送別会の折、「おまえは名古屋へ帰ったら東海支部を作れ」という先輩の言葉はいつも気になっていました。ある日、家に帰ると「やまざと」が届いており、パラパラ見ていると、なんと24期の坪井君が東海支部設立の呼びかけをしているのではないですか。早速連絡を取り、1月27日、名古屋駅前の居酒屋にて8名で設立準備委員会を開催した次第です。

設立総会開催後、10月末までに3回のPW、暑気払いの宴を行いました。ありがたいことに、怠け者の代表が何もしなくても、準備委員会に集まった方々ははじめ、坪井事務局長(兼宴会部長)、小島PW推進委員長(17期)と竹本PW推進副委員長(21期)がどんどん引っ張って行ってくれます。その上、足も口もすこぶるお元気な先輩諸氏(失礼)がいろいろな提案をしてくださいます。活動が軌道に乗りましたら、近畿や関東の支部との合同PWも計画したいと思います。(秋には坪井事務局長が近畿支部のサンマパーティーに参加しました。)

「ふるさとへ廻る六部は気の弱り」という言葉があります。青春を過ごした地を離れ、全国を行脚して修行に明け暮れた六部(行脚僧)も、年を取り気が弱ってくると、恋しいふるさとについつい足が向いてしまう。我々の「ふるさと」はワングル時代に逍遥した自然豊かな山々であり、仲間と酒を酌み交わした酒場なのです。



## OB会東海支部設立の経緯

24期 坪井 陽典

昨年「やまざと26号」で、「OB会中部支部」を立ち上げたいと書かせていただき、その際に、協力をしていただける人を募集しました。今から思えば大変失礼な話ですが、あのように書いたものの、皆さま日々の仕事や生活でお忙しい毎日を過ごしていますので、「支部の設立など、まあ無理だろうな。」とっていました。

ところが、やまざとが発送されてすぐの昨年12月29日、事務所で仕事をしていると、夜の10時半ころ、21期の竹本さん（私が1年生のときの4年生です）と17期の小島さんから、「協力するよ」とのメールをいただきました（12分だけ竹本さんのメールが早かった）。このメールには、心からうれしく思いました。その後も年明けに15期の佐野（竹内）さんからメールを、8期中野（田中）さんからはハガキでご連絡をいただきました。

予想外のことでうれしくもありましたが、各自から送られてくるメールに個別に対応していると、とんでもなく時間がかかりますので、今年の1月11日にメーリングリストを立ち上げ、そこで情報を共有することにしました。

このあとしばらくは、16期、17期の人たちが私の知らないところで動いていらっしまったようで、1月27日に、「中部支部OB会設立準備会を開くのだ」ということになりました。

1月27日午後6時、名古屋駅付近の居酒屋で8名が集まりました。私が顔を知っていたのは21期竹本さんと29期深井君だけで、後の5名は初めてお会いする方たちでした。このときに17期の小島さんが、おもむろにウィキペディアの「中部地方」をプリントアウトしたものを出し、「中部支部だと北陸地方も入るので東海支部ね。（こんなかわいい言い方ではなかったと思いますが）」と言われ、名称は「金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会東海支部」となったのです（この後も、小島さんのまめさには驚かされ続けるのですが）、もっともメーリングリストは、これよ

り前に作ってしまったのでURLは中部のままです。

またこのときにおおざっぱな方向性として、(1) 設立総会をする、(2) 山に行く、(3) 山に行かない人もいるだろうから、夏と冬は飲み会をする、(4) やってみてうまく行かなかったら考える、ということを決めました（(4)は単なる先延ばしですが...）。先にも書きましたように、このときOB7人（私を除く）が集まり、私は、「これなら東海支部を立ち上げることができる」と強く思った次第です。もっともその反面、ほぼ全員が仕事を持っている身ですので、時間的な制約が多く、どこまでやっていけるのだろう、どういう方法でやっていけばいいのだろうという心配があったことも事実です。

このときに来ていただいた7名のOBの方は、心より謝して、お名前を記させていただきます（敬称略）。

中野 謙一（8期）、川端 俊朗（16期）、  
小島 敬（17期）、松岡 創（17期）、  
渡邊 和文（17期）、竹本 彰（21期）、  
深井 嘉浩（29期）

この1月の集まりの後、4月14日の設立総会までに何度か打ち合わせをしました。何回目かの打ち合わせの後、最後に川端さんと二人きりになり、男二人でショットバーに行き、色々なことをぼつりぼつり、しみじみと話していたのが妙に感慨深かった記憶です。このように東海支部設立に向けて動き出しました。設立総会までの間、松岡さんや渡邊さんからもたくさんのアドバイスをいただいたものの、やはりどうやっていいのか、私自身が、皆目見当がつかないのが実際でした（いまもよく分からないのですが）。それで、「そうだ近畿支部に聞こう。」と思い、無謀にも、お目にかかったこともない11期の加藤忠孝さんの自宅にお電話をさせていただきました。ありがたいことに、加藤さんからは様々なアドバイスをいただきました。その中でも、「代表は、作らないといけない。何かアクシデントがあったときに、責任を負う者がいないとよくない。ところで川端君はどうしている。彼はやるよ。」というお言葉をいただき、「それじゃ（オレ、責任取りたくないし）川端さんに代表をお願いしよう。」と決めたのでした。

こうして設立準備会から2か月半後の4月14日、東海支部の設立総会を名古屋市にある国際センタービルの中華料理店東天紅で開催する運びとなりました。受付は26期の益川(清水)さんと29期の深井君にお願いしました。参加者は、4期の森島稔さんから30期の大村捷志さんまでの34名でした。思いもよらぬ多数のOBの方に参加していただき、心から感謝しています。ありがとうございました。

当日は、川端さんの司会のもとで始まり、各自の自己紹介、歓談を経て、松岡さんが用意くださったワングルの歌集をもとに、6期の今井春昭さんが歌唱指導をされ、無事に終了しました。この会の間、あちらこちらで電話番号(メールアドレス)の交換がされているようで、みなさんが、再びつながるきっかけにはなったのかもしれませんが。

その後、PWも3回開催され、12月には、5期6期の久島夫妻による鳩吹山第4回PWも行われます。その後は、年末に忘年会も予定しております。PWは、小島さんと竹本さんに丸投げの状態、お二人には心から感謝しております(来年には、私も出させていただけます)。11期の森川功さん、12期の野村益己さんには、いつもPWのすばらしい写真を提供していただいています。ありがとうございます。

東海支部はまだ立ち上がったばかりで、試行錯誤の状態です。もっとみなさんに来ていただける魅力ある企画を考えたいと思っています。私自身、「人生、自分の思い通りにならないことがほとんどで、それならば思い通りにできる範囲くらい好きにすればよい」とは思っています。でも、気が向いたら、東海支部の企画に参加していただければ、うれしく思います。

## 2. PW報告

### 東海支部御在所岳PW

21期 竹本 彰

平成24年5月12日、東海支部初のPWが開催された。

私は、朝5時半に家を出て、湾岸道路、東名阪を通って、四日市インターから出て鈴鹿スカイラインへ向かった。鈴鹿山脈には雲がしっかりかかっている、あまり天気はよくなさそうだった。6時半すぎに裏道登山口のトンネルをあがって左にある駐車場に着いたが、10分ほどの間にほぼ駐車場は満車状態になった。近鉄電車の動向を気にしつつ、中道の登山口に8時20分頃に着く。小島さんが近鉄電車の駅から登山口までメンバーを送迎してくださったおかげで、順次8人が集まり出発した。

登山組は、森川さん(11期)、野村さん(12期)、佐野さん(15期)、川端さん(16期)、吉田さん(17期)、坪井さん(24期)とウチの女房。

次から次へとパーティーが来る。ロープウェイが上を横切る場所で休憩をする。眺めは良く、遠く知多半島、セントレア(中部国際空港)、渥美半島、神島などが見える。負われ岩、地蔵岩などをみて登るうちに事件が発生する。T氏の靴底が分離してしまった。テーピングテープで応急処置。その後は、ところどころ渋滞しつつ、山頂駅までちらほら咲くアカヤシオを眺めつつ登る。



Photo by 森川(11期)

山頂駅で、神林さん(13期)、渡辺さん(17期)、小島さん(17期)、益川さん(26期)と娘さん、の5人と合流。風が強くて冷たい

ので、とりあえず山頂駅のレストランに避難した。気温は10度くらい。白井さん(9期)を12時まで待つ組と先発して御在所頂上に向かう組に分かれる。白井さんが先行してみえたので、待機組に連絡し、山頂で集まった。さらに中野さん(8期)がみえて、全員揃う。中野さんから夏ミカン?を一人一つずついただく。これをここまで担ぎあげるのもたいへんだと思う。

風をさけつつ各自が昼食を取った後、山頂の大きな看板の前で記念写真を撮り、山頂駅でロープウェイ組と分かれて裏道を下山する。中野さんは、裏道を上がってみえたということで、中道を下山する。登り組から靴底を理由にT氏は脱落した。下山組は、渡辺さんと小島さんが加わり9名になる。休憩もはさんで、午後3時過ぎに下山した。直接帰る方を小島さんの車まで送り、あとは白井さんの紹介のグリーンホテルにて入浴した。



Photo by 森川(11期)

グリーンホテルでロープウェイ組と再会し、山談義などに花が咲く。午後5時過ぎにホテルを出て、菰野の駅まで送り、帰路に着く。

何はともあれ、たいへん有意義な第一回のPWでした。参加されたみなさん、ありがとうございました。特に、送迎をしてくださった小島さん、ロープウェイ組の引率をかって出てくださいました渡辺さん、参加者の表をまとめたり、持ち物についてのアドバイスくれたりと助けてくれた坪井君(T氏)、グリーン

ホテルを紹介してくださった白井さん、本当にありがとうございました。次回の笠置山(かさぎやま)でまた会いましょう。

#### 【御在所岳ロープウェイ組】

26期 益川 珠美代

昨日は娘ともどもお世話になりました。今日自宅(鈴鹿市)から見える鈴鹿山脈の稜線は、晴れて終日くっきりクリアです。昨日はもっと雲がばんばん流れていて、寒くなりそうだったため、毛糸帽子なども取り出して身支度しました。

ロープウェイに乗り込むときに、「山頂の気温3.3」とボードに書いてあったので、寒さに弱い私と娘はビビり、急いで手袋もはめました。レストランで小島さん、神林さん、渡辺さんをお見かけして、混ぜていただき、登山組からの連絡を受けて展望台へ出たとたん、風がビュビュッと。あれ、何メートルくらいの風ですか?登山組の諸先輩はどこまでもタフで、「別に...」という感じで疲れも見せず、上がってみえました。ここでT氏の「靴底事件」も知りました。山頂へ向かうため、スキー場の斜面を上がっているとき、娘が「もう、えらい(疲れた)」と言うのにかこつけて、私もこっそり休憩しつつ、何とかたどり着きました。

お昼、竹本さんご夫婦は、あの風の中で焼きコンロを駆使してソーセージを焼いてくださり、ご馳走になりました。キュウリの漬け物もすすめてくださって、カジカジしました。美味しかったなあ～。中野さんのザックから夏みかんが次々と、また次々と魔法のように出てくるのにも仰天しました。食べ物だけでなく、要所で行動の指示もしてもらい、ホントありがとうございました。

帰りは、遊歩道みたいな道を、鎌ヶ岳を眺めながらロープウェイの駅に帰り、下山組とお別れして、5人でロープウェイのひと箱に乗りました。その後、白井さんのご紹介で、グリーンホテルの温かいお湯に浸かることも出来ました(白井さんにも感謝感謝です)。

ロープウェイ組にしてこの充足感、明日からまたがんばろうーっと。

## 東海支部笠置山PW

17期 小島 敬・幸子

平成24年6月23日、笠置山(かさぎやま)に出かけました。東海支部第2回PWです。

梅雨の晴れ間、まさに「ワングル日和」の、穏やかな一日に恵まれました。

### 【コース】

JR 恵那駅 坂折の棚田 望郷の森駐車場  
笠置山 姫栗バス停 JR 恵那駅

朝9時、JR 恵那駅改札口に10名が集合しました。森島さん(4期) 久島さん(5期) 中野さん(8期) 森川さん(11期) 野村さん(12期) 佐野さん(15期) 川端さん(16期) 窪川さん(23期) 小島2名(17期)。窪川さんは刈谷からバイクで、他の皆さんはJRでやってきました。

恵那駅からタクシー2台に分乗して、木曾川の支流、中野方(なかのほう)川沿いに坂折の棚田へ。窪川さんはタクシーの後ろから付いて来ます。木々の緑が美しく、恵那栗の花が満開。中津川、恵那は栗きんとんで有名です。タクシーの運転手さんは、名古屋から5年ほど前に中野方の古民家に移住し、仕事の傍ら畑作をして青空市場にも出しているそうです。究極の田舎暮らしではないか。日本棚田百選に選ばれた「坂折(さかおり)の棚田」では稲の緑とのどかな集落の風景を楽しみました。笹百合やアザミ、ウツボグサの花の色がとても鮮やかでした。正面には笠置山のやさしい山容が望めます。そのままタクシーで笠置山頂上に近い望郷の森駐車場へ向かいました。途中、林道わきに何ヶ所かある、ペトログラフ(古代岩刻文字)の刻まれたピラミッドストーンにも寄りました。計画段階では、ペトログラフへの皆さんの反応が心配だったのですが、興味深くピラミッドストーンやペトログラフを観察されていたので、ホッとしました。皆さんの草花や遺跡などへの好奇心の強さには、驚かされました。

望郷の森駐車場から笠置山頂上までは、30分ほどヒノキの中の山道を歩きました。途中、北西に展望の開けたところから、優美な山容の残雪の白山が望めました。最初に見えた山が白山とは、いかにもKUWVのOB会らし

い。ヒノキの植林がブナ林へと変わり、ほどなくして笠置神社奥社のある頂上(1128m)に着きました。木々に囲まれて展望はありません。奥社前の広場にリュックを置き、ヒカリゴケ探検へ。神社の裏手の巨岩群を下りていくと、岩奥に天然記念物のヒカリゴケがひっそりと身を寄せ合っていました。



白山の遠望 Photo by 森川(11期)



Photo by 森川(11期)

奥社へ戻り、頂上を北西側へ少し下りたところにある2階建ての展望台へ。西から白山、御岳山、奥三界岳、中央アルプス、南アルプスの峰々、そして恵那山。こんなに遠望が利くとは想像すらしていませんでした。展望台周辺で昼食。おやつ(行動食)として、今回参加できなかった渡辺君(17期)からもらった「お嫁さんのお菓子」を皆さんに配りました。今月結婚した渡辺君のお嬢さんの幸せのお裾分けです。名古屋嫁入り物語必需品のお嫁さんのお菓子です。さすが皆さんよくご存じで、ひとしきり、お嫁さんのお菓子談義をしました。

笠置山からは南へ姫栗笠置山登山道を下りました。望郷の森駐車場にバイクを置いてきた窪川さんとは、登山道分岐でお別れ。ヒノキの植林の中の道をひたすら下りました。花に乏しい植林の道では、唯一、薄紫色のコア

ジサイ(小紫陽花)が目を楽しませてくれました。林間にひっそりと控えめに咲いていました。楚々として、かつ粹な花です。もともと巨岩の多い山なので、ピラミッドストーンらしき岩やいわくありげな形をした岩が点在しています。ほとんどペトログラフ頭になった私には、どの岩の線状痕や窪みもペトログラフに見えたほどです。でも、どれも関係ないようでした。

頂上から1時間ほど下りてくると、ヒトツバタゴ(ナンジャモンジャ)の巨木に出くわしました。国の指定天然記念物です。最近名古屋などでも街路樹として植えられていますが、この木は自生としては最大(高さ19m)のものです。

前々日までの雨でやや歩きにくい道を30分ほど下ると別荘地帯へ出て、あとは舗装道路を歩きました。山道は涼しくて快適だったのですが、麓に出るとやはり暑い。急にロードPWになりました。姫栗の集落には縄文時代の堀田遺跡がありました。ここで私が道を間違え、姫栗川沿いのどん詰まりまで皆さんをお連れしてしまいました。正規の道までの登山返しが生んどく、皆さんにご迷惑をおかけしました(姫栗のメンヒルをご案内することができなかつたのが心残りです)。コース終点、木曾川沿いの県道68号線の「姫栗バス停」(標高240m)に辿り着いたのが、午後2時30分。標高差890mは、下りとは言え結構ハードでした。タクシーを呼んで恵那駅へ戻り、3時過ぎに恵那駅で無事解散。

天候と好奇心旺盛なメンバーに恵まれた楽しい第2回のPWでした。参加いただいた皆さん、ありがとうございました。

## 東海支部白草山PW

5期 久島 俊也

平成24年10月27日、東海支部第3回PWは、白草山(しらくさやま)に出かけました。少し雲が出ていましたが、暑くもなく寒くもなく快適な山行きになりました。

白草山：信州と飛騨の国境で、木曾御嶽山の南南西に位置する標高1641mの穏やかな明るい山です。

【計画者】小島敬・幸子夫妻(17期)。このために下見登山までされて、至れり尽くせりでした。

【参加者】野村さん(12期)、佐野さん(15期) 小島さん夫妻(17期)、渡辺さん(17期)、竹本さん(21期)、坪井さん(24期)、そして久島(5期)の8名

【コース】乗政(のりまさ)コース

JR 下呂駅 (県道乗政下呂停車場線) 林道車止め地点 (黒谷林道) 林道終点登山口 尾根展望地 箱岩山分岐点 白草山頂上 箱岩山分岐点 箱岩山 箱岩山分岐点 林道車止め地点 JR 下呂駅

【PW詳細】

9:30 JR 下呂駅集合。野村さん、渡辺さん、坪井さん、久島の4名は、JR 高山線で。佐野さん、小島さん夫妻、竹本さんの乗用車組とここで合流。夫々の車に分乗して、県道乗政下呂停車場線を約30分のドライブ。

10:04 林道車止め地点着。既に10数台の車が路側に駐車されている。特に駐車場は整備されていない。白草山は、毎年下呂町民登山が行われるなど、地元では大変親しまれている山で、駐車スペースを探す時からその様子が伺える。車止めのゲートを越えて、黒谷林道を遡上。左の断崖や右の谷は、ドウダンツツジやトウゴクミツバツツジ等の鮮やかなクリムソンレッドの紅葉が見ごろで、「すごいね！」の言葉しか出ない状況だった。

10:47 林道終点(登山口)着、ここで小休止。登山口には、頂上まで2.7kmの標識がある。コース中には、数か所この標識があり迷うことはない。ここから樹林帯の中の岩のゴロゴロした道になるが、良く整備されているので歩き易い。

11:40 尾根展望地着、小休止。ここからは、尾根道で、カラマツや背の低い常緑樹とチマキザサに囲まれた道になる。ノコンギクやツルリンドウの赤い実がところどころに見え、目を楽しませてくれる。このところ熊が里に下りて来るニュースが続き、出発前はメールで熊談義が飛び交い、熊除けの鈴必携などと言っていたが、登山者の数も多く、杞憂に終わった。箱岩山の分岐点を過ぎると、チマキザサの草原の向こうに御嶽山の全容が現れる。草原の道を登りつめると、そこが白草山の山頂である。



12:26 白草山山頂着。昼食休憩。山頂は1641m。チマキザサに覆われた草原状の台地で、広々とした360度の展望が広がっており、正面に雄大な木曾御嶽山が迫っている。この日は頂上付近に雲が掛っていたが、数日前に降った新雪がところどころに残っており、得をした気持ちになった。この辺りは嘗ての木曾御料林で、御嶽山との間の谷は木曾の王滝川を登りつめた辺りになる。御嶽山の左奥には、かすかに乗鞍岳が見え、右手間近に小秀山が、右手後方には恵那の低山が連なっている。

休憩中に、坪井さんの大きなザックから出て来たのは、卓上ガスコンロと2のペットボトルで、本格的なコーヒーが提供された。少し寒さを感じていた皆は、感謝感謝。また、川端さん(16期)の差し入れの外郎は、お手紙通り小島幸子さんが、きっちり切り分けてくれ、仲良く頂きました。

13:15 下山開始。元の道を戻る。チマキザサの中に続く一本の登山道は、何とものどかである。箱岩山分岐点を右折し、しばらく行くと箱岩山頂上である。

13:30 箱岩山頂上着。箱岩山は1669mで白草山より高い。東側は樹木に覆われて御嶽山は見えないが、直下に高森山(1592m)が見える。又雲に隠れて見えないあたりが白山かなどと、何処へ行っても白山の影を探すのは、青春の思い出そのものだからだろう。もとの道を辿って下山。上から眺める紅葉もまた格別である。写真撮影に時間を取られる野村さんは、若干遅れ気味。

14:59 林道終点(登山口)着、ここで小休止。夕暮れが近付いてくると、紅葉は一層美しくなる。黒谷林道を一挙に下る。

15:35 駐車地に到着。残っていた車は、数台になっていた。3台の車に分乗して、下呂駅近くの公衆浴場へ。

16:15 公衆浴場着。下呂に詳しい竹本さんの案内による。料金は350円だが、なかなか良い湯で、一日の汗と疲れを流して、皆さん満ち足りた表情。私ごとながら、3年前に椎間板ヘルニアをやって、左足に少し麻痺が残っており、皆さんに迷惑をかけてはと心配していたが、湯に浸かって筋肉を揉み解していると、まだまだついて行けるかなと、次のPWに繋がる気持ちでした。入浴後、JR下呂駅に移動。

17:00 JR下呂駅で解散。車組は、これから2時間強かけて、名古屋に帰らなければなりません。本当にご苦労様です。JR組は、キヨスクで缶ビールを買い込み、車中四方山話に花を咲かせて、帰路に就きました。

#### 【番外編】御厨野コース

白草山には、もう一つ登山コースがあり、紹介しておく。

国道257号線を中津川から下呂方向に向かい、舞台峠を越えた麓の御厨野から、県道白草山公園線を登ってゆくと、林道加子母乗政線にでる。ここで車を降りて、鞍掛峠方向に林道を歩いてゆくと、登山口に到着する。登山口の標高は980m、山頂まで3.1kmの道標がある。道はこちらも良く整備されていて、歩き易い。登山口からの距離は若干長いですが、アプローチがかなり短いので、このコースもお勧めである。



Photo by 野村(12期)

## 関東支部とPW

18期 横井 恒雄

私の記憶が確かならば、「KUWVOB会首都圏支部」が発足した2005年(平成17年)の10/22(土)に、ミシュラン三ツ星の人気スポット高尾山に参加者6名で行き、その様子を「やまざと」vol20 2006年1月号に寄せた。PWの記事を寄せるのはそれ以来である。

毎月のように例会のある近畿支部のようにはいかず、記録を整理してみると、これまで7年間で延べ11回に過ぎない(別紙参照)。中には支部PWと呼ぶには異論があるが、「関東支部メンバーが多数を占めているPW」という程度の意味で受け止めていただきたい。

それでもこのところ3年位続いて年2回ペースで関東支部PWができて、段々とコアメンバーが固まり、次はどうするかという話がされるようになってきたので、ようやく軌道に乗ってきたかなという感がある。

私がコアメンバーと呼んでいるのは、過去複数回PWに参加している、合津さん(6期)、藤井さん(8期)、山中さん(9期)、青柳さん(11期)、三尾さん(13期)、清家さん(14期)、吉田さん(17期)、堤君(18期)、横井(18期)、松下君(20期)、昨年までの川端さん(16期、現在東海支部)で、企画を出せば応じてくれそうな面々である。これ以外にももう少し参加メンバーが拡がればと切に願っている。

### 【今年(2012年)のPW】

昨年8月のPWで尾瀬ヶ原から至仏山を登った後、メンバーから「来年は八ヶ岳か南ア」との思いがあり、6月2日の総会前に、夏は八ヶ岳か甲斐駒、秋は御前山(奥多摩)プランを事前にメールしておいた。総会で合津さんから瑞牆山に行きたいと声があり、瑞牆山に行くなら秋が良い、夏は甲斐駒だろうとなんとなく決まった。紅葉の頃はいつもの定番、奥多摩でまだ登ってない御前山と3回企画することとなった。関東支部で年3回企画するのは画期的なことである。以下、今年のPWについて報告する。

### 1. 甲斐駒ヶ岳PW

・日程：8月4日(土)～8月5日(日)

・メンバー：合津、藤井、清家、吉田、堤、横井、松下、村井(横井の中学同級生)の8名

・行程

(1日目)

JR甲府駅集合。バスで北沢峠。1ピッチで仙水小屋(泊)

(2日目)

仙水峠 - 駒津峰 - 甲斐駒ピストン - 駒津峰(昼食) - 双子山 - 北沢峠 - 山溪園(芦安) - 甲府駅解散

甲斐駒への思い - 募集返信メールから

甲斐駒は私にとっては思い出深い山。初めて登った「アルプス」と名前がついた山が甲斐駒(大学1年夏合宿)で、大学3年のときは佐治君(20期)と2人で黒戸尾根から登った記憶がある。

甲斐駒に対する思いを、今回の参加者募集返信メールの返信から3通紹介しておく。

『甲斐駒は、はるか昔に、早川尾根から眺めた記憶があります。たしか1年生の夏合宿(井上さんがリーダー)の時だったと思います。以来、その雄姿が忘れられません。30数年ぶりに、やっといけます。夏の南アルプス、楽しみです。』

夏合宿へ行くときのようなワクワク感が蘇ってきます。よろしくお願ひします。(20期松下)』

『お誘ひありがとうございます。仙水峠から甲斐駒は1年生夏合宿の計画にあったコースです。悪天で、摩利支天あたりで引き返したのを思い出します。その時の4年生が清家さんで、40年ぶりのリベンジですね。(17期長田)』(長田さん自身は不参加)

『PWのお知らせありがとうございました。甲斐駒は「眺める山」なので、参加いたしません。中央線に乗って塩尻の実家に行くたびに、あれは甲斐駒と思って眺めている山があるのですが、そうだとしたら本当に峻厳な山ですね。甲斐駒は高村薫さんの著作「マークスの山」の舞台だったのでと申しだしました。楽しい山行になりますように。(13期三尾)』

### 食事のおいしい仙水小屋

1 日目。猛暑の甲府駅からバスで 2 時間、終点の北沢峠に着く。北沢峠から 1 ピッチ入った仙水小屋は、30 名位が定員の小さな小屋だが、食事がおいしいことで有名だ。夕食の御膳に刺身が出る山小屋は珍しい。

小屋が狭く、専用の食堂がないので夕食は外のベンチ。一日目は殆ど歩かず、早く着いてビールやらワインやらウィスキーを飲んで、すっかり出来上がってとはいかないが、わいわい話をする。前週の白山 P W では南竜小屋の食事が今ひとつだったのか、山登りに行ってこんな食事は経験がない、白山の南竜小屋に見せてやりたい、と合津さん。

最近、街のレストランでも出された料理の写真をとる人が多い。山の食事を撮影するのは珍しいが、清家さんがしっかり撮影した。



### 仙水小屋の朝は早い - 仙水峠のご来光

2 日目は相当朝早く出発しないと 13 時の北沢峠のバスに間に合わないと心配していたが、仙水小屋では朝 3 時に起こされる。ふとんをたたんで、壁に収納した組み立て式テーブルを出さないと、朝ごはんが食べられないからだ。夜明け前に出発して仙水峠でご来光を仰ぐという小屋の主人の配慮でもあるらしい。弁当の用意はなくパンを売ってくれる。昨夜の消灯は 8 時だったので、夜中によく起きた。寒いが満開の星空だった。

4 時 15 分、真っ暗な中、ヘッドランプをつけて出発。ゴロゴロした岩の道を登り、4 時 50 分仙水峠に着いた。日の出に間に合う。八ヶ岳方向から日が昇る。快晴、ぬけるような青空。八ヶ岳、富士山、鳳凰三山のパノラマで美しい。



真夏の南アルプスは絶景 - 快晴に恵まれて駒津峰に向かって高度を上げると、後ろに仙丈岳が大きく見えてくる。北岳、白峰三山も見えてくる。遠くに塩見岳も。駒津峰まで登ると槍穂高も見える。雲ひとつない快晴。

駒津峰にリュックを置いて小さな荷物で甲斐駒ピークを目指す。人気の山だけあって人が多い。

直登コースをさけてトラバース道を行くが、結構急峻である。風化しつつある花崗岩の道を 1 時間半位登り、山頂に着く。33 年前の記憶よりもハードに感じるのは年のせいだ。黒戸尾根から登ると 7 合目で一泊するから、かえって楽との意見もあると藤井さんが語る。白砂の頂上は 360 度のパノラマである。



十分に眺望を楽しんだ後下山。ゆっくり下ったが、13 時の北沢峠のバスに間に合う。14 時半、芦安の「ヘルシーハウス山溪園」でお風呂に入ってビールを飲んでくつろいだ。

後日談 - 天候に感謝、鉄人の面目躍如  
『明けて今日 6 日、朝 5 時には甲斐駒ヶ岳は雲の中。6 時前から降雨。天気にも恵まれた山行に感謝、感謝。(北杜市に住む藤井さんメール)』

『昨日とは違って変わった天候で、埼玉でも雨模様です。すべての条件に恵まれ、やっと甲斐駒の頂上に立つことができました。ありがとうございました。(清家さんメール)』

また、合津御大はその後、南アルプス単独行に行き、その報告メールをいただく。

『8月17日～20日で、三伏～塩見～熊の平～間の岳～北岳～広河原と歩きました。前半は強烈な雷雨でしたが、終わりは好天で甲斐駒が良く見えました。帰りには例の山溪園でフロに入り帰りました、報告まで。』

(編集者注：この合津さんの南ア山行は今回のやまざとに寄稿いただいています。詳しくはそちらを)

## 2. 瑞牆山(みずがきやま)・金峰山PW

・日程：10月20日(土)～10月21日(日)

・メンバー：合津、藤井、清家、吉田、堤、横井、松下の7名

### ・行程

(1日目)

JR 蕪崎駅集合。車を出してくれた藤井さん、清家さんの車に分乗して瑞牆山荘駐車場に。途中、みずがき山自然公園に寄る。瑞牆山荘 - 富士見平小屋 - 天鳥沢(昼食) - 瑞牆山(2230m)ピストン - 富士見平小屋(泊)

(2日目)

富士見平小屋 - 金峰山(2599m)ピストン - 瑞牆山荘 - ラジウム温泉「増富の湯」 - 蕪崎駅解散

### 白峰三山に初冠雪

蕪崎駅に集合して藤井さん、埼玉から中央道で来た清家さんの車に分乗して瑞牆山荘に向かう。北杜市に住む藤井さんには地元であり、道が空いていて景色の良い広域農道をナビしてくれる。PW前日はかなり冷え込んだようで白峰三山は初冠雪したとのこと。

車中から夏に行った甲斐駒、八ヶ岳、南アルプスがよく見えた。時間があるのでみずがき山自然公園に寄る。今日登る予定の瑞牆山の絶景スポットで、いくつもの奇岩巨岩がそそり立つ特異な山容が圧巻である、これでPWを終えてもよかったくらいに。

### 富士見平から瑞牆山

瑞牆山荘駐車場に車を置いて富士見平小屋まで2ピッチ、ザックを預け、サブザックにして天鳥沢へ下り、昼食。そこから梯子の連続や桃太郎岩、大ヤスリ岩、鋸岩などの巨岩の基部を巻きながら急登を登ること1時間半、花崗岩一枚岩のピークに立つ。晴れているものの、あいにくガスが上がってきていた。絶景とまではいかないが明日行く金峰山方面は望めた。頂上の岩の向こうは絶壁で、松下君が無謀にも岩に飛び移り絶壁を覗く。



### ランプの宿 - 富士見平小屋

計画段階で清家さんより9月9日(日)午前8時から、NHK地上放送の「小さな旅山の歌」で瑞牆山と富士見平小屋の放送があること、富士見平小屋が昨年4月から営業再開しているメール連絡があり、ここに泊まることにした。

富士見平小屋の外見は昔のままでかなり古い。荒廃にまかされていた山小屋を現在の山のオヤジが内装を直して営業再開したようだ。(富士見平小屋HP、NHKオンデマンドで配信中)

この小屋には電気がない。夜はランプを灯し夕食となる。ランプの灯の下での食事もなかなか風情がある。鹿肉のポイルしたものとタタキ風なもの、鶏肉を焼いて甘辛いたれをかけたもの、具だくさんの汁物が晩ご飯のメニュー。またまた「これに比べて南竜の食事はひどかった」話になる(小生は知らないので誤解のないように)。朝もランプの灯のもとで朝食、焼餅とおじや。シンプルだがおいしい。(ちなみにこの小屋には昼食の弁当は用意がない)



### 金峰山 - 抜けるような青空、絶景の岩稜

2日目、6時すぎに富士見平小屋発。大日小屋を越え、巨岩の大日岩基部を巻き、ひたすら樹林の中を登る。ところどころ霜柱、岩の表面に氷が張っている。富士見平小屋から3時間、「千代の吹き上げ」という標識の後、急に樹林が終わり、「砂払いの頭」と呼ばれる開けた稜線に出る。登山道の岩稜の先は絶壁である。

富士山、八ヶ岳、白峰三山、甲斐駒、昨日登った瑞牆山が一望に見渡せる。とりわけ富士山は真っ白、裾野が美しく広がり秀麗である。北岳、間ノ岳にも雪が付き美しい。もともと金峰山は奥秩父随一の眺望といわれている所で、それに加えて雲ひとつない快晴で抜けるような青空、この上ない眺望である。稜線は北アルプスを歩いているような岩場で、遠くに金峰山のシンボルである五丈石が見える。1時間程度で歩いて金峰山頂上に着く。



下りはいつも時間がかかる。

登ってきた道を帰るが、下りはいつも時間がかかる。我々のパーティは、何処へ行っても登りには強いが下りに弱いのが特徴だ。「究極の選択。カレー味の ソコと ソコ味のカレーとどちらを選ぶ」「ソコ味のカレーに決まっているじゃないか、カレーは食べられるが、ソコは食べられない。」「小水は飲んだことがある、ちょっと苦い。ソコは食べたことがないからなあ。」いつも場を盛り上げようとする松下君。くだらん話をしながらゆっくり富士見平に下った。

### 3. 来年に向けて - はじめて春のPW

今年は甲斐駒、瑞牆山、金峰山といずれも岩の山を登り、真夏と秋ともに快晴で富士山、南、奥秩父の山々を堪能した。金峰山の帰りの増富ラジウム温泉入浴後の反省会で、次の御前山はカタクリの花が咲く春が良いとの清家さん発言で、11月の御前山PWは中止することになった。紅葉も見ってしまったし、特に異論なく決まる。来年は初めて春(4月下旬～5月上旬)にやることになった。

夏、秋に向けては、また本格的なものを企画して総会で案内したい。今年はできなくても来年は年3回できるだろう。

この原稿を書いているときに、井上君(18期)から御前山PWの実施問い合わせがあった。来年の春にしたと返信したところ、「楽しみにしている」との返事もらった。今以上に参加メンバーが増えていくことを期待したいところである。



## K U W V O B 会 関 東 支 部 山 行 記 録 ( 2 0 0 5 ~ 2 0 1 2 )

	登った山	標高	実施日	温泉	宿泊	参加者数
1	高尾・景信山	599m	2005/10/22	-		6
2	大山	1,252m	2007/8/4	七沢温泉		11
3	川乗山	1,363m	2007/11/3	-		10
4	棒ノ折山	964m	2007/11/24	さわらびの湯		4
5	雲取山	2,017m	2008/8/9	-	雲取山荘	4
6	雲取山	2,017m	2010/8/21	興雲閣神の湯	雲取山荘	8
7	三頭山	1,531m	2010/11/6	数馬の湯		8
8	尾瀬、至仏山	2,228m	2011/8/5	尾瀬戸倉温泉	ふじや旅館 竜宮小屋	9
9	大岳山御岳山	1,267m	2011/11/12	-		9
10	甲斐駒ヶ岳	2,967m	2012/8/4	ヘルシーハウス山溪園	仙水小屋	8
11	瑞牆山	2,230m	2012/10/20		富士見平小屋	7
	金峰山	2,599m	2012/10/21	増富温泉		7
計						

	合津	藤井	山中	青柳	三尾	清家	仁藤	吉田	横井	堤	松下和	松下早	長田	井上	川端	宇野	大西	矢野	村井
	6期	8期	9期	11期	13期	14期	14期	17期	18期	18期	20期	20期	17期	18期	16期	15期	18期	-	-
1																			
2																			
3																			
4																			
5																			
6																			
7																			
8																			
9																			
10																			
11																			
計	6	8	6	4	5	12	1	10	12	7	8	1	1	1	4	1	1	1	1

## 2012 野沢温泉スキー合宿レポート

8期 野村 孝弘

今年も恒例のOB会スキー合宿が2月18日(土)、19日(日)両日いつもの野沢温泉で開かれました。毎年幹事の11期青柳健二さんには全く感謝あるのみです。今年は15回目ということで特に気を配って企画されたように伺いました。さて、このレポートを青柳さんから頼まれた時は気軽に受けたのですが、その日の朝食内容も覚えていないアタマでは記憶は全て薄墨色で、それも霧の彼方に消えかかっています(2月25日現在)。それではシゴトを全う出来ないと兎も角書き始めましたが収録内容には全く自信なし。ほとんどが作り話かも知れません。雰囲気だけでもお伝え出来れば上出来と思っている程度ですので、多々不備をどうかご勘弁願います。

さて今回は、東日本大震災後初めての集合で、それぞれに都合を付けてとはいえ、集まることが出来た幸運を噛み締めた数日でもありました。実際登ってみると、長坂ゴンドラの終点駅レストランは大震災に連動した北信濃地震で被災し大きく変わっていました。全員がシニア券を付けの参加ですが、いつもながら十年前にもどってなかなか壮観なものでした。ついでながら、去年は帽子を取って「シニア」とやった顔パスが約1名いたと聞いていますので、実質平均年齢は上昇したということです。時間的余裕のある人が多くなったためか、私を含めて17日(金)からの2泊組は14名を数えました。

第15回記念ということで、定宿の「リゾートハウスふるさと」からの特別サービスもあって大いに盛り上がったのですが、幹事の心意気を感じたのか雪の方も出血大サービスで、17日夜は街中で40cmも積もって、前日到着組の車はすっぽり雪の中。去年は前日が猛吹雪で、当日快晴だったことを思い出して気を取り直し、加えて首相もドジョウだということで18日当日に2匹目を期待したのですが、残念はずれて猛吹雪。クルクル替わるところかの国のリーダーとお天道様は全くどうにもなりません！先に壮観と申しましたのは、シニア券全員が、足下もよく見え

ないこの猛吹雪の中へ思い思いにゲレンデへと飛び出して行ったことです。この日の上部ゲレンデの積雪は4mをかなり超えていたのではないかと思います。吹雪による以外にも、全財産を腰の周りに体内備蓄していることにも配慮して私は上へは行きませんでした。(「正解々々」は後ほど分かりました。)



参加者はいつものゲストも含めて全21名。19日から参加が1名、18日の日帰り1名でこの日の宿泊は20名でした。大雪で高速道の規制や不通などアクセスも乱れていたために早朝の到着予定もままならなかった組は、上の平ゲレンデの集合場所レストハウス「湯の峰」には早めに顔を出して早々に飛び出して行ったり、逆に、ゆっくりとヒルメシに到着する組もありで、昼食時に全員の顔は揃わないままだったように思います。私は4年前から参加していますが、今年のニューフェイスは9期谷道正晴さん、同じく吉田幸造さん、12期宮島孝司さんでした。谷道さんと吉田さんはそれぞれ丹波、滋賀と遠方からの宿泊での、宮島さんは近場の上田からの日帰りでの参加でしたが、いずれも45年ぶりの再会でした。宮島さんは両親介護のため宿泊出来ないとのことで、事情身につまされた一同は最敬礼。

さて、ゆっくり組も0期田村さん差し入れのワインを飲み干してゲレンデへと出発。その田村さんは2km近い上の平ゲレンデを長坂ゴンドラ駅からゴボゴボ歩いて下って来たそうで、途中スキー場職員から「怪しげな男」と誰何されたそうです。…むべなるかな、でもこれが0期田村さんの田村さんらしいパトスです。このあたりで上部ゲレンデにいた上級保田(9期)・青柳組から「上部は



目視が利かないので下へ降りよう」という案が出され、「さすが先生！」と多くが賛成して日影グレンデに降りて行きました。このグループは保田学校に入学し、グレンデツアー風レッスンを受けながらしばし遊弋して、その後少し早めに柄沢めざして下山。途中、マイペースをモットーとする物足りない組は適宜どこかのグレンデへ消えて行きました。迷子の心配もありましたが、救援隊編成の必要も無く4時頃までには各自無事に帰投して来ました。

心地よい疲れ（猛吹雪でも？）には温かい甘酒。で、玄関口ビーの薪ストーブに乗っている お出迎え甘酒 はたちまち売り切れて「ふるさと」さんに refill してもらうことに。そして部屋に入れば大休止と自由時間ですからもう歯止めはききません。甘酒から 甘をとった濃厚ワインを飲み始める人、内湯を少し早めに開けてもらって風呂に入る人、雪の中外湯へ行く人などそれぞれでした。昨年も「リゾートハウスふるさと」の国際化が話題になりましたが、今年もオーストラリアからを中心にした国外の宿泊客が沢山同宿していて、風呂場で裸の国際交流した参加者も何人か出たようです。中には少女のようにかわいい少年と出くわして、思わず「ここは男湯か」と問うたということもあったようです。“意”は通じたのかとの問いも出て笑い話です。あるいは同じく風呂場での国際交流で、勝った勝ったと言って出て来る輩がいたりして、いったい裸で何の勝負をしてきたのか。

相撲じゃ有るまいし、だがサテ？？ン？・・・。

そして、まずまず4時半過ぎには全員が十年前にもどってワイワイ飲み始めていたように思います。それぞれに歩いて来た人生があって、それぞれに出会った人たちがいて、それぞれが背負っているものが有るはずなのに、どうしてこうも簡単に十年前に戻れるのか。考えてみれば不思議ですが、あの当時誰もがたまじめでバカなことを真剣に（あ失礼！）やっていた、という安心がある故でしょうか。当時のみんなには、これこそが本当の学生生活で、人生の中心みたいに思う気分が横溢していたと思います。英語やドイツ語などははるか辺縁部に有ったか無かったかでした。それがクラブでしたし、部室でした。

あのみんなが持ち合わせていたバカ真剣から実に多くのものを学ばせてもらったと思っています。賢愚・正邪はあざなえる縄のごとし。もちろん単位・成績の問題などではさらにはない！何が可となるか非となるか、あるのは真剣さとそれ故の議論のみ。可否の目先が分かるようでは人生も終盤か？兎も角それ故思考回路と反応系がおおよそ安心できる（本当か？）と暗黙裏に了解しているのでしょうか。そして言えることは、「こういう仲間を共有出来ている自分は幸せだ」ということです。これは宝物ですし、この大休止と自由時間の過ごし方は、まだ人生が終盤ではないと言うことの確認行為のようにも思えます。で、気がでない幹事の青柳さんは「まだ出来上がらないで下さい！夕食は6時半です、まだ2時間もあります！」との連呼を繰り返すことになってしまいました。それも「んなこと言わないで幹事さんも飲んだら～」と言う声がかかってはもうどうしようも有りません。待ち遠しい、そして旨い食事もあることながら、食後の今夜のメインイベントは『キリマンジャロの白い雪』『オーロラは白い』そして『モンブラン大滑走と大槌町ボランティアツアー』の3（4？）部作です。その前奏の狂騒曲はこのようにして始まり、6時半まで進んで行きます。もちろん委細構わず別世界の中へと眠り込むご仁もいます。さすがに学生時代から何処でも眠れるように鍛えてある人たちは違います。



6時半の食堂では幹事の青柳さんの挨拶があって、15回目の今回は特別で、全員に歌のCDがプレゼントされました。かつてのワグネル愛唱歌なるものを集めたものですが、往年の部員が蛮声を振り絞っている録音ではなく、レッキとした歌手が歌っているのを探し

集めて、個人で編集したのですから労作です。以前に 11 期加藤さんが編集したものの続編で『冬の章』です。同封されている歌詞カードの糸綴を奥さんにしてもらったとかで、青柳夫人の内助の功が垣間見えて羨ましく思ったのは私だけでしょうか。帰宅後、ウチのカミサンなら...? と本人を前にして考え込みながら、大変懐かしい調べを堪能しました。そして、フム~、正しい歌はこういう節だったのかと我が音痴を棚に上げて聞き入った次第でした。何せ当時はカセットも発明されておらず、テープレコーダーなるものも特別な人や組織しか持っていない時代でした。従って当時のメロディーはみな蛮声を伴う口伝しか無かったのです。当夜も夕食パーティのバックグラウンドに流されていたのですが、誰彼構わぬ放談の蛮声と食事の美味さですすむアルコールによる嬌声とで押し流されてしまっていたようです。ここで定宿「ふるさと」から自家製ドロク一升の特別サービスが差し入れられました。「これがまたウマイ！」で、歓声を蛮声と嬌声へとさらに押し出したようでした。このあたり、そして宿泊料金の特別割引など幹事さんの心憎い配慮でありました。はじめて参加の人達の自己紹介があったりしながら(といってもヤー、オーでほぼ十年前に戻ってしまいますが・・・)時間はドンドン過ぎていきます。そのうちに 15 期舟田さんが篠笛を取り出し、くだんのCDとの共演奏やダミ声との狂奏で終盤になっていきました。そんな中、誰かが「ワンダーフォーゲル部は確か体育系ではなく文科系のサークルに入れられていた」との言があって、十年前にワンゲル論なるものがあってと微かな記憶が蘇りました。夜更けまで際限なく論議を尽くすため、最終日のテントの明かりがなかなか消えなかったのを思い出しました。この伝統は顔皺の深さや髪の色・量が変わっても生き続け、今こうやって食堂で続いていますし、第二部の大部屋に移ってさらに盛況に進行していきました。当時はよくわからない議論だったことが、トシフリそれなりのカタチを整えると、これが立派な 報告なるものに変身です。近代兵器と映像を伴って大変説得性が出てきて、“百聞は一見にしかず”のはずですがシーンと聞き入らないのはワンゲル育ちのせいでは

しょうか。あるいは視覚映像をどれだけ見ても納得出来ず、各自が勝手に描いている概念で議論する方が我々の世代には向いているのでしょうか。

食堂から朝霧・夕霧の間をぶち抜いた大部屋に移って、一同車座になってワイワイやっていると、加賀友禅に身を包んだ舟田女史がしなやかに現れて加賀流(?)お点前の始まり始まり。もう十分満足しているお腹のはずですが、羊羹や全国各地の御菓子がドンドン入るから不思議です。なに? 別腹で手足の中まで胃腸が入り込んでいるって? それじゃヘルニアだ! お茶とお菓子を銘々美味しくいただく中、第二部は 11 期片田さんのスカイラインコース全走のノンストップ滑走映写報告から始まりました。片手デジカメで殆どストックを使わずに一気に滑り降りたという凄い映像でした。次の 8 期山村さんの『雨の白山南竜集中PW』(画像は 9 期保田さん作成?)では、スキー合宿には参加していない懐かしい顔々を見ることが出来ました。ただその表情は雨に祟られて手持ち無沙汰のためか、恨めしやと言っている手配写真のようで、リーダー山村御大の心労が伝わって来るものでした。この頃になると、くだんのドロクや持ち寄った全国の地酒、さらに、前日宿から差し入れられたもう一本の美酒一升などもあって「もうどうにも止まらない」状態に陥っていました。

続いて『モンブラン大滑走と大槌町ボランティアツアー』は青柳さんの報告です。前回の野沢スキー合宿の折、「この合宿終了後フランスへ発つので来年のモンブラン報告は乞うご期待」と胸を張った青柳さんの発言が有ったのですが、出発直前の大震災と成田一時閉鎖などがあって報告はかなり緊迫したやり取りから始まりました。ところがいざ着いたシャモニーは近年にない雪不足で春うらら。加えてホテルのTVで流されている日本の震災や原発の映像を見たり、ガイドや同行者とのギャップを感じたりで気持ちは徐々にトーンダウン。ほとんどスキーらしいスキーをしないままモンブランの写真を多数かかえて帰国と言う報告でした。しかし、フランス側からまたイタリア側からと場所を変え、展望台の上から下からとパノラミックな写真が披露され、そのすばらしさは我々

行ったことの無い者を感嘆させるに十分なものでした。さらに、帰国後『大槌町ボランティアツアー』に参加して復興に手を貸すとともに、帰京しては脱原発の集会にも参加していると言う報告が有りました。この大変なときに海外ヘスキー逃亡したような後ろめたさもあってかな(失礼な!)、でもこの合宿に参加している我々にもそのような気分がないでもないなと思いましたが…。我が学生時代から政治運動からは距離を置くワングル風土でしたが(とと思っているのは私だけで、あの学生運動華やかかなり頃は違っていたのかも…、私は卒後で知りませんが)、その中からも何かしらの声を上げたインパクトのある事故報告でした。我々生物は化学結合のエネルギーの世界に生きている、と言うことは私の薄い理解でも何とか解ります。科学技術で物理結合のエネルギーを使うことが出来るようになって、全体としてはまだ社会も技術も熟度が足りていないと思ったりもしました。多くの生命と多大な国土を失ったこの一連の災害は、きっかけは天災でも人災と言わざるを得ないでしょう。この災害が日本人的思考方法とその集合としての日本社会の在り方を考え直す歴史的ターニングポイントとなって(んな難しいこと言うな~!)、社会的熟度が上がってほしいと思いながら聞いたのは私一人ではなかったと思います。氏をはじめ多くのボランティアに見られるように民度は十分に高いのですから。

次の『オーロラは白い』は9期山中さんの報告です。アラスカへ行ったのは今年の1月末ですから出来立ての報告です。この1月は太陽フレアの活動が激しく強い太陽風による磁気嵐が懸念され、また大きなオーロラの出現が予想されていました。その最中にアラスカ行きを執行出来た山中さんの幸運を全員が羨ましく思ったのは間違い有りません。さて山中さんによるとオーロラは見慣れた赤や緑の光のカーテンとして現れるのではなく、白いカーテンとして現れるのだそうです。それを長時間露光で撮影するとおなじみのオーロラになるのだそうです。そもそもオーロラを見に行けるなどということを羨ましく思っている輩ばかりなので、薄暗い中に白いカーテンが揺れているだけなら場末のストリップと同じじゃないかと下品なヤジが入ったりしま

した。が、ビックリマナコのまま、堪えてフリーズして、バルブで長時間露光した写真には、それは綺麗なそして雄大なまぎれもないオーロラが映っていて皆納得でした。加えてアンカレジからのアラスカ鉄道の道中とマッキンレーの間近を飛んで目的地に着くまでの氷雪パノラマも感嘆ものでした。また、濡れ場は全く映っていないても山中さんがいかに奥さんを大切にしているかも伝わって来る力作でした。

メインイベントの『キリマンジャロを還暦の歳に登ってしまったの巻と生命がみなぎるサファリ』は舟田さんの報告です。延々と続く乾燥した赤道直下の半砂漠のはてに、白く雪を頂いた平たい頂のキリマンジャロがありました。赤い大地を歩く映像を見る限りは、5000メートルを超えるアフリカの巨峰も、日本百名山をこなしている舟田さんには苦も無いように見受けられました。しかし最後のアタックは真夜中出発で、そのまま続く帰路の行程は往路の2日分を一気に1日でこなしたりと、かなりの強行スケジュールが窺えました。実際、高地での長いアプローチのトライアルは生き残りレースのようで、途中高山病などで体調をくずして登頂をあきらめる人たちも報告されました。これを聞いて「私はきつとそっちの組だな」と妙に納得して、行きたいような行きたくないような気持ちになりました。キリマンジャロの氷河はすでに大分消えていて、ここで三浦雄一郎がスキーをしたというような面影は有りません。あと20年もすればこの氷河も完全に消えてしまうだろうと言う報告に、今更ながら地球温暖化を実感しました。乾燥した大地に氷河が吸い込まれて行く不思議な光景で、かつてデスバレーで見た草木の無い荒れ地に積もった雪の感覚を思い出しました。頂上付近の映像には動物の死骸(ラーテル?)が映っていたり、もう少し下の草原(半砂漠-サバンナ?)ではヒヒ(ゲラダヒヒ?)やゾウが見えたりと、サファリとしても興味深いものでした。動物好きには、キリマンジャロ登山は無理でもサファリはいいなと思えるものでした。こっちがライオンのお腹に入りさえしなければ、こちらの腹にキリンやシマウマを入れるのは余り違和感ないな、などと不謹慎な空想をしたりして…。ン?それじゃライオンに怒られ

るか。

例年ならばこの辺りでワインシュタイン博士理論なるものが登場するのですが、その数式と理論概要を書いた abstract を同宿のオーストラリア人に渡したのが運の付きでした。説明を求められて、話題提供者である0期田村さんはキリマンジャロサファリ途中で中座。原発事故でまき散らされた放射性物質を集めて、磐梯山のマグマ溜まりに埋め込めば全て消滅する。つまりこれで放射性物質は処理出来る、と言う画期的発想と理論のようでした。が、それ故天然ウランの最大輸出国の民としては、商機と違って勉強会を申し込んだのかも知れません。ともかくアインシュタインの向こうを張って物質不滅の法則に真っ向勝負のはず？ でしたが、言語のギャップはいかんともしがたく、たまたま挨拶に訪れた19期早川君の応援で何とか事なきを得て、皆の所へ帰って来ました。が、このハプニングのショックのためか、あるいは我々ボンクラ頭には function = X 1 ? なる計算式が理解不能なためか、その後の報告は何となく弱気になって終焉。画期的なアイデアも頭の中に??? だけが残ってしまいました。そして報告会の最後はこの合宿恒例の「北の都」大合唱で、田村御大は大トリの音頭をとってようやく溜飲を下げたのでした。

少し風邪気味なので別室で休ませてもらって、余韻を残して夢の中へと幸せになって行きました。



そして翌19日(日)は朝から快晴となりました。「行いのいい人は誰なのか」などの詮索はだれも致しません。天運を好しとしてそれぞれ少人数に分かれて思い思いにスキーを堪能し、昼食時には皆再びレストハウス「湯の峰」に集まってきました。愉快的仲間

はまたぞろワイワイの始まりですが、今日は帰路の運転を考えて燃料にアルコールを加えた人は残りいませんでした。そして来年までの健康と、スキーを持つてのこの場所での再会を誓い合って思い思いのコースで下山して行きました。

以上、スキー合宿のレポートのはずが飲み会とお楽しみ会のレポートになってしまいました。自己申告でない会員相互による各位のスキー評(私の耳に入った)では、保田さんはやはり先生で皆納得ですが、谷道さんの華麗なそして果敢なスキーが話題になりました。また、スカイライン全長を一気に駆け下る4期佐藤さんの持続力に「さすがマラソンで鍛えてある」と感嘆の声が上がっていました。そして時々消える吉田さんと11期上村さんのマイペース・スキーも話題になり、多士済々と言うことでした。今年は18日の天候の都合でビデオ撮影会が無くなりました。それでも皆の陽気な呑んべい顔は、大部屋にセットされた保田さんの定点カメラと19日から参加した11期加藤さんのビデオに納められました。昨年同様、皆のすばらしいスチール写真(多くは19日に撮影?)の提供も呼びかけられています。保田さんが腕を振った新しい記録DVDが仕上がるのは何時か。全員が待ち遠しく思って期待しているところです。

青柳さんの記憶では初回のシニアは一人だったそうですが、15回の今回は全員がシニア、つまり還暦超えでした。これじゃ老人会の合宿じゃないかと思いを巡らしているうちに、いつまでスキーが出来るだろうかと考えてしまいました。体力と故障の具合は人それぞれで、今年も無事に参加できた幸せをつくづく感じています。さて来年はどうなるか。ここから先は鬼しか知らない世界です。鬼の世界と言え、あの頃はこのバカに無償の応援をしてくれた人達がいた。思い出すといふ涙が出てしまうが、彼らを送り出して見回してみたら次は自分がそっちへ行く番だと気がついた。順番はまちがいに廻って来るのだろうが、それまでは出来る限りふんどし締めて立っていたい、どのみちもうモノの役には立たないんだから。いやこりゃ失礼! そんな大それたことではない。まあ、オムツじゃなくてパンツの紐くらいか。それが

我々を育ててくれた社会というものにお返し出来るささやかなお役立ちだ、と言うのは遊んでばかりの身勝手か…。たしかに満足感や爽快感もスキーのモチベーションなのだが、人生の下り坂に対するほんの少しの意地もあるような気もする。(もっともありすぎると滑らないでひっくり返ってしまうが…) ああ人生の下り坂～ (誰の歌だったっけ!) いくら意地を張っても体重の載せ替えが出来なくては制動が効きません。それじゃ単なる突貫(呐喊?)ジジイか(何たる古語!)。そも、物の無い時に育った世代には常に何かを作ったり、手足を動かして何かをしていなければ落ち着かない習性がある。フム! なあんだスキーも単なる貧乏性がなせる技かななどと思いついて、ならばこの十年間に身に付いたのはウエスト周りだけでもいいではないか。いずれバカなのだからと開き直って、これが自分のアイデンティティなのだと言いたくなる。そう思って振り返ると陽気に騒いで楽しんでいた合宿の顔々が浮かんでいとかなし。いや、いとをかしが、いやいや、いとうれしか。兎も角も、ものぐるほしけれ! 皆さん本当に頑張っているな～。そして頑張ってきたな～。さらにさらに、この合宿に向けて板や

ウエア、靴などを新調して臨んだ方々は実にすばらしいと思う。そして参加者全員のスキーは間違いなく上達していると思う。この目の現実、「人間いくつになっても向上するんだ」という誰かのつぶやきが聞こえてきました。まさしく! これはこれはスバラシイことですゾ! 中学からスキーには同行してくれなくなった愚息も30過ぎ。その勧めで今の板を買って、15年ぶりにスキーを再開したのが60過ぎ。靴とウエアを買ったのはこの合宿に参加するための4年前だった。“下手の横スキー”だがまだ元は取れていない。難しいことは考えないで、「ののちゃん」に出てくるシルバー会で結構! 行き先不明でも結構! でも、やっぱりもう少し若いひとも入ってほしい! これを読んでいる若い人たち、アルコールばかりじゃなくお茶も羊羹もあるよ～! 食事の後にはコーヒーもあるよ～! ぜひぜひご参加を～! 人生は短い! 何の縁もゆかりも無い金沢に来てもう半世紀が過ぎ去ろうとしている。長い旅だったが時の歩は早足だ。来年も楽しく集まるゾと誓った言葉を思い出し、そう有りたいたいと念じて投了です。



## OB南竜集中PW2012

8期 山村 嘉一

7月25日(水)~27日(金)に、4回目の『KUWVOB南竜集中PW2012』を行いました。例年遅い梅雨明けを心配しながら、4月2日に南竜ケビンの予約をしたのでした。だんだん近づいてきた7月21日の金沢では大雨、洪水、土砂災害警報が矢継ぎ早に発令されました。いわゆる梅雨明け直前の豪雨だったようで、長期予報が見事に当り、7月下旬にしては久しぶりの梅雨明けに巡り会えて、最高のお天気の3日間でした。

まずは名前と顔が一致しやすいように下掲写真により参加メンバーをご紹介いたします。一部の方を除き、60代後半から70代前後の年齢構成にもかわらず、若さを維持しようとしている様子を確認されたい。以下、コメントは小生の独断と偏見によるもので、ご本人の人格・尊厳を云々するものでないことをご了承頂き、かつ敬称省略にて失礼！

左上のサングラスは、山靴のパンクをテーピングテープの活用で修理し、一挙に靴職人となった8期伊豫欣二(吹田市)。ちょっと上にあがって卒業以来40年振りに白山に来て山靴が入山直後にパンクした9期清水一(習志野市)。かなり山をやっておられる13期山西久美子さんの御主人(富山市)と現役時代の不遇を晴らさんと頑張っている13期山西久美子(富山市)。毎回参加で田部井淳子さん

張りの干し柿を差し入れしてくれる8期藤井信晴(北杜市)。活発にかなりハードな山行も厭わぬ9期谷道正晴(福知山市)。日本百名山に飽き足らず海外登山も度々の9期山中重夫(八王子市)。退職した日に飲み会も断って石井スポーツで登山靴とザックを誂えた9期伊藤俊成(船橋市)。大きなスイカを差し入れしてくれた健脚の11期長岡正利(つくばみらい市)。左に戻って、学校の先生の風格そのままの8期穴田昭一(小松市)。今でも馬力十分鉄人28号か?の9期鍋島武(八千代市)。単なる連続参加ではつまらんと平瀬道から入った元気な9期吉田幸造(彦根市)。また左に戻って一応首謀者の8期山村嘉一(金沢市)。入賞常連の写真ほか多才で元気な7期村田泰恵(金沢市)。現役時代の風貌を崩さず前日に入山し別山往復を済ませた7期吉村弘二(千葉市)。胃袋をちょん切っても酒もマラソンも山も平気な6期合津尚(東京都)。同期の紅一点でかつては男子部員の高嶺の花だった8期高水間淑子(舞鶴市)。女性アルピニストとして活躍目覚ましい特別ゲストの谷口けいさん。岳人の今年8月号の表紙を飾り、登山紀行も掲載。9期山中の格別のはからいでご参加頂けた。以上これまでの最多の総勢18名全員を紹介しました。また、今回の行事に対して、参加者の他に、多くの先輩後輩諸氏から、都合などで参加できないがよろしくと近況や思い出話もからめたメールや便りがありました。



さて、入山コースは砂防新道からがほとんどで、遠方からの人も多いため、別当出合の出発時刻はばらけていたようです。それぞれの足取りで、追いつ抜かれつしながら、また、平瀬道から入った人もいましたが、懐かしい顔が次々に南竜に到着しました。

二日目は南竜から展望コースで御来光を拝み御前峰、お池巡りを堪能したグループ、少々朝寝をしてエコーラインから御前峰、お池巡りを楽しんだグループ、別山往復をしたグループなどに分かれましました。エコーラインでは、早々にクロユリはもちろん華麗な高山植物を楽しみ、登るに従い、近くは別山、遠くは槍穂から御嶽までが綺麗に眺められました。室堂～御前峰～お池巡りとのんびりと楽しみ、終わり頃には白山では外来種のコマクサが、小さなガレ場に除去されきらずに生き残っているのを見ることが出来ました。



都合で二日目に入山された方もおられ、26日午後4時過ぎには、最初の写真のように全員が南竜に集合できました。二晩ともにケビンでは懐かしくも楽しい話に盛り上がったことは言うまでもありません。

下山ではあの中宮道を下った猛者もいましたし、観光を降ろうという云う人もいましたが、多くは無難に砂防を降り、白峰温泉の総湯に浸かって流れ解散となりました。

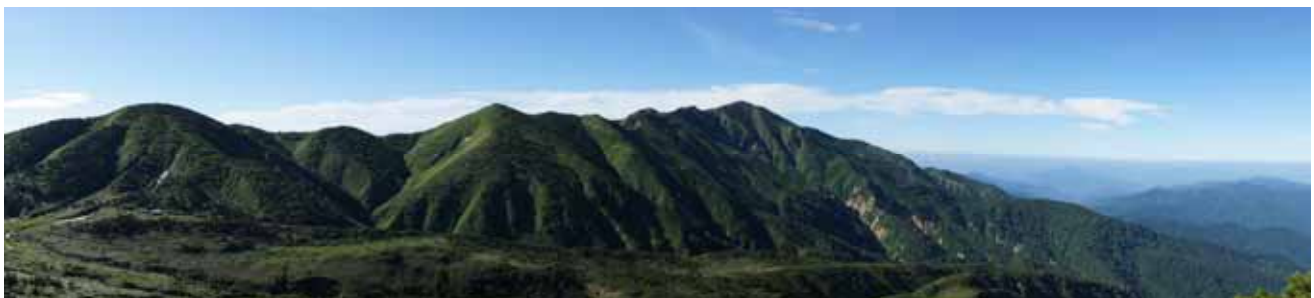
上記のほか、お花松原（雪が残っていてク

ロユリには早かったとのこと）へ行って、下山は観光新道を降った人、清浄ヶ原を往復した人、南竜への集中には参加できなかったが、車中仮眠して平瀬道を単独日帰りして参加メンバーとすれ違った人、禅定道から一里野へ下った人などなど、この好天の時期に、それぞれのコース設定により、最高の白山を楽しめたようです。

今回のトピックスの一つに、山靴の寿命と応急処置法が挙げられます。山靴のビブラム底が剥がれる事故は意外と多く、現役時代にも良く遭遇したので、以来小物入れには針金とペンチの類は欠かしていない。今回は別にして、今シーズンも二足の修理に役立った。それにしても伊豫さんのテーピングテープでの応急処置は、針金と違って、人間様用の高いものを使うとはいえ、割と手軽で有効な方法でした。また靴底のハガレは山歩きで履き尽しても起こりますが、長期間下駄箱に保管してあっても起こります。靴だから良いようなものの、人間の足腰も大事にしておくだけでは、とても危ないと考えべきかと。伊豫さんの後日コメント...『靴は新品に替えられても本体は交換がききませんから』

さて、下山後、現役時代の夏季合宿の反省会みたいに、ワイワイガヤガヤと事の次第を反芻したい気持ちですが、そんなことが出来るはずもなく、このつたない原稿を書くために、過去メールや写真のフォルダーを繰りながら、一人ニヤついている次第です。

なお来年度も性懲りもなく7月下旬の24日(水)、25日(木)、26日(金)で南竜ケビンに二泊予約しようと思っています。多数のご参加と、小生も70歳を迎えましたので、世話役交代のお申し出を心よりお待ち致しております。



<エコーラインからの別山>

## 再び塩見から北岳へ

6期 合津 尚

今年の夏休みは節電対策で、なんと2週間にもなってしまった。前半は南竜PWに参加し、40数年来の白山になった。昔2年の時に別山の地震後偵察で、南竜雪渓でのピバ-クなどを思いだし懐かしかった。

その後関東在住のOB達で甲斐駒にも行き体が出来たので、再度おやじの葬儀で中断した塩見から北への縦走を決断した。タイミングとしては遅い旧暦のお盆の後になり、天候との折り合いが懸念されたのだが。

1日目(8月17日)

新宿から高速バスで伊那大島へ。そこから路線バスで登山口の鳥倉へ。このル-トは南アでは最も標高の高い起点となるので、登りには良い。

登り始めた直後から突然に猛烈な雷雨となったが、不用意にザックの底に雨具を入れてしまった。取り出すと他のものが濡れるので半そで・短パンでそのまま強行した。3時間で三伏峠小屋に着いたが、身震いが止まらなかった。尾根筋でないので風が吹かないだろうと、甘くみたがやはり雨具着用すべきであった。雨具はすぐに取り出せるようにしなければ。水は2リットル600円。

2日目(8月18日)

4時50分ヘッドランプ着用で出発、塩見小屋を8時50分に通過、岩場を登り9時15分頂上へ。まだ見通しあるも雷雨の気配濃厚なので、半分の昼飯でスタ-ト。やはり12時から雷雨、今度はカップ着用した。下りの尾根筋で風が強いので要注意である。14時45分に予定通り10時間で熊の平小屋着。ゆっくりでも休まずに歩けば、まだコ-スタイム通りに歩ける。

熊の平は霏雨気の良い小屋で、水も豊富で無料。雷雨止まず、残りのラ-メンを食う。

3日目(8月19日)

4年前に親の葬儀に間に合わせるために、夜間に登った三峰山へのル-トを反芻しながら登る。あの時は暗闇に鹿の眼が数多く光っていた。夢中で登ったので記憶に残らなかったが、昼間に登ると意外とキツイ岩場の連続

であった。

三峰からバカ尾根への分岐が解り難く、当時はすごく苦労したことが思いだされた。

雷雨の気配が通過して天候が回復、北岳への登りは快調。北岳の頂上では韓国の若者で溢れていた。日本の山も竹島同様に占領されたか。早く着きすぎたので頂上でのんびりとラ-メンの昼飯とする。そばを通過する子供に美味しそうと褒められるが、本当に美味であった。時間がありこのまま下山しようかと迷ったが、1時半に肩の小屋で泊まった。

夕方、日没前に雲が消えて2週間前に登った甲斐駒や、仙丈や富士山も見えるようになった。鳳凰三山側にブロッケン現象が現れて、最近流行の多数の山ガ-ルと共に楽しむ。

この小屋はちょうど3,000mの位置にあるが、見通しが良いのでケ-タイで下界と普通に会話が出来た。

4日目(8月20日)

4時に起床しご来光を見るために、再度北岳の頂上に向かう。富士山よりもかなり左側の鳳凰三山の背後から太陽が出た。ワングルらしい若者達に山の名前を教えている間に、自分たちのいる北岳の影が現れた。仙丈や遠方の塩見に別れて下山。

大樺沢の雪渓でウイスキー-の氷割りを飲む。美味であった。この雪渓を登る左俣のコースを詰めるのも面白そうに見えた。

帰りは甲斐駒の時と同じ芦安温泉の山溪園で入浴、ピ-ルと残りの予備食ドライカレー-を食している間に、蚊に刺される。

・まとめ

(1) 全行程でほぼ案内のコ-スタイム通りに歩けた。水を2リットル程度に減らし、不足分は小屋から買う。ステッキを使ったことも効果があった。

(2) これで単独行の登山は高齢につき、危険なので終わりにしようとしたが、来年にはまたやりそうだ。

(3) 塩見から熊の平を走破すれば、100KMウルトラマラソンの体力を証明できると想定したが、9月末の大会では81キロで10時間の時間制限でアウト。世の中甘くない。

(4) おやじの葬儀で中途半端になっていた行程を完結できたこと。

以上



篠島さん(8期)が今年の10月、日本100名山踏破を果たされました。5年前に既に達成された「日本300名山西日本エリア111座」踏破と合わせて、10年以上に及ぶ歩みを寄稿頂きました。

## 日本300名山西日本エリア111座・ 日本100名山踏破を顧みて

8期 篠島 益夫

私と山の関わりを振り返りますと、学生時代は別としても仕事に就いてからはワングル現役時代とは打って変わって山と無縁となり、新入社員の昭和42年(1967年)からの松下電工函館営業所勤務時代にはスキーで大怪我、スキーも止めることになり、就職後1971年までの4年間は山とはますます無縁になってしまいました。

その後の12年間の釧路勤務時代は、職場の若手にも山好き、アウトドア好きの人が居たことから、阿寒、知床、大雪の山や溪流釣や海釣にも少しずつ出かけるようになり、自然とのお付き合いも回復してきました。また子供達の成長に合わせて、野に山にキャンプや山菜取りなどで、余裕のある休暇時には幼い子供達のお相手として出かけていました。たまたまキャンプのついでに雌阿寒岳や大雪の旭岳に登って、疲れから下山後に熱を出した記憶が今でも娘たちはあるといます。

この16年に及ぶ自然豊かな北海道を後にしたのが昭和58年(1983年)で、勤務地は近畿(兵庫・大阪本社)でしたが、ここで山とは再び無縁となり、数年に一度くらい大山、氷ノ山、伊吹山、白山に家内や娘達と出かける程度の9年間でした。

その後、2年間の勤務は広島となりました。愛媛県境の健康管理上の課題も出てきて、家内の月1度の単身生活の点検、チェック訪問に合わせて広島県内の山を歩いて旧交を温めると共に減量効果を狙って山ウオークを再開しました。中四国地方の山ガイドブックなど、山に関わる書籍を求めたのは久しぶりの事でした。今から考えると、この2年間の準備期間のような時期が、岡山へ移動後に始める事になる「日本300名山西日本エリア111座踏破」のチャレンジに繋がったと思います。

広島時代は上司にも恵まれて、2年で3年分ほどの仕事が出来た感もありましたが、平

成8年12月からはナショナル住宅産業㈱へ急遽転籍することとなり、住宅建材や設備などの住宅部材の営業から住宅・アパートなど建物の生産、営業、建設の世界に身を置くことになりました。新しい居住は中四国エリアの交通拠点である岡山でしたが単身赴任は継続しました。

当時の私にとっては、会社人間として入口の会社と出口の会社が違う事態になるのは想定外であり、全く新しいチャレンジを迫られる日常で、過去の経験も人脈も活かしにくく、一方転籍した会社の業績はその年(平成8年度・1996年度)の決算をピークとして翌年度からは急降下、今までの事業形態から新しいビジネスモデル確立に向けた大きな改革期を迎えていましたから、私のストレスはピークを迎えており、その上にタバコを止めてからは体重がさらに増える状態に陥り、健康維持の必要からも運動量確保とストレス減少を図る必要に迫られるような状況になっておりました。

こんな生活状況の中で、相変わらず月1回の定期訪問を続けてくれる家内とも相談して、休日利用で運動と気分転換の為に「中四国エリアの日本300名山17座踏破(中国8座+四国9座)」を始めようと決めたのが平成10年(1998年)の春でした。この「日本300名山中四国エリア17座踏破」は振り返ると、その後の「日本300名山西日本エリア111座踏破」次いで「日本アルプス100名山踏破」更には「日本100名山踏破」と段階的にスケールアップしてゆく私の山旅のスタートでした。



四国石鎚山天狗岳直下:300・100名山(2000年11月)

この岡山を拠点とする「日本 300 名山中四国エリア 17 座踏破」の同行パートナーは全てが家内の節子との 2 人旅でした。土曜日に岡山を出て日帰りまたは 1 泊 2 日の山旅で、中国 8 座、四国 9 座の 300 名山を歩くのですが、土日の催事の多い住宅営業部門ですから、計画通りには出来ない場合も多く、仕事・天候・家内の定期訪問の 3 拍子が揃わないと実現せず、最後に残った高知・愛媛県境の南予アルプスの三本杭(1226m)と篠山(1065m)を 2 泊 3 日で済ませたのは、平成 14 年(2002 年)3 月 20 日前後で「結婚 30 周年記念登山」と銘打っての山行でした。



四国南予アルプス三本杭頂上：300 名山(2002 年 3 月)  
～「結婚 30 周年記念登山」と銘打って～

2002 年 10 月大阪の本社部門への異動までには「300 名山中四国エリア 17 座踏破」を終えていましたが、本社への異動に伴い、自宅からの通勤に変わったのを契機に、これまでに済ませた「中四国 300 名山 17 座踏破」の山行の対



白山北弥陀ヶ原と三方崩山：300・100 名山(2005 年 7 月) ～白山弥陀ヶ原はお花松原の更に奥のため、人も少なく花の時期には桃源郷そのものという佇まいとなる～

象エリアを大幅に拡大して北陸 3 県・北アルプス・東海 3 県以西の「日本 300 名山西日本エリア 111 座踏破」を目標にする形にスケールアップすることとしました。



北ア・蓮華温泉：300・100 名山(2005 年 8 月)  
～大雪溪から白馬 - 雪倉 - 朝日岳 - 五輪尾根 - 蓮華温泉のコースの 4 泊 5 日の縦走～

しかし、現役中は休日利用の範囲からは脱することが出来ず、目標の割には遅々として山行は進まず、活動が増えたのは退職後しばらく経過した平成 18 年(2006 年)以降でした。

此のころは、北アエリアの 300 名山の踏破は残りわずかになってきて、北アなどがシーズンオフの春や秋は九州の 300 名山をセットすることが多くなりました。しかし、有明山、餓鬼岳、笠ヶ岳、霞沢など、北アの残った山の場所はバラバラでやりにくい所でした。



九州・開聞岳頂上：300・100 名山(2007 年 4 月)  
～6 期小川さんと登頂。節子は下界で温泉めぐり～



北ア・燕 - 餓鬼岳稜線：300 名山（2007 年 10 月）  
 ~ 前泊の中房温泉を基地に、有明山登山後に再び中房温泉宿泊、燕に登って燕山荘泊して餓鬼岳への縦走コースに出た。雪はその日は無く好天に恵まれての縦走だが岩場のアップダウンが多く、コースタイム以上の時間が掛かった。餓鬼小屋の宿泊者は3人で、小屋も営業を休止する直前だった。朝は小屋付近はうっすらした初雪で、小屋泊しての餓鬼からの下山時に転倒滑落したが、幸い雑木とネザサの斜面で無事だった。~



九州・宮之浦岳：300・100 名山（2008 年 6 月）  
 ~ 15 期高村千佳子さん。淀川小屋 黒味岳 宮之浦岳 新高塚小屋 縄文杉 荒川口のコースで3泊4日、満開のシャクナゲの中をゆく。節子は島や滝、屋久杉めぐり。新高塚小屋は満杯で、私は外でシートを被って寝たが、鹿に邪魔されて一睡もできなかった~

2009年に入ると、300名山西日本エリア111座の締めくりタイミングで追い込みの為、単独行も多い山行の年となりました。



恵那山頂上：300・100 名山（2009 年 9 月）  
 ~ 恵那山は中央アルプスの山であるが、岐阜・長野県境にあるので東海3県を含む300名山にもカウントされる~

最初にスタートしてから11年が経過した2009年10月、「日本300名山西日本エリア111座踏破」はいよいよ最後の山となりました。栄えある？最後の山は、裏木曾の小秀山（1982m）でした。



裏木曾・小秀山頂上：300 名山（2009 年 10 月）  
 ~ 6 期小川さん。乙女溪谷の登山口から3つの滝を眺めてからカモシカ渡りの岩場を登り、しばらく緊張感のある登りが続く。下りに使うには不安があるので下山は距離は長いが三の谷ルートで下山した。下呂温泉の湯は熱かった~

「日本 300 名山西日本エリア 111 座踏破」は、仕事現役時代の平成 10 年（1998 年）に始めて平成 21 年（2009 年）に漸く終わりましたが、一方では 2007 年大雪ツアー（山茶蕎温会企画）への参加、2008 年では南八ヶ岳や御嶽への単独行、2009 年 7 月には高村千佳子さんとその山仲間の山本さんと中央アルプス木曾駒に出かけ、その足で山茶蕎温会企画の南アルプスツアーに参加、8 月には金沢の舟田節子さんの紹介で、一緒に北日本観光ツアーで鳥海山、月山に出かけたり、同月にも小川先輩と中央ア縦走にも出かけるなど、活動エリアを広げていました。そんなことから「300 名山西日本 111 座」を終えても終わった気分には程遠く、続けて 2010 年には、「日本アルプスの 100 名山の中での未踏の山」を南アルプスを中心に歩き、同年 10 月には南アの鳳凰三山を最終に「日本アルプスの中の 100 名山」を終えてやっと一息ついたというところでした。一方では、100 名山という視点では未踏の山がまだ 36 座も残っているとの事実から、初めの考えにはまるでなかった「日本 100 名山踏破」も急遽、視野に入れてという事になってきた訳です。

山行を続けながら徐々に積み上げるような格好で「日本 300 名山中四国エリア 17 座踏破」

「日本 300 名山西日本エリア 111 座踏破」

「日本アルプスの 100 名山踏破」「日本 100 名山踏破」への展開を平成 10 年（1998 年）から平成 24 年（2012 年）までやって来た、という気の長い山旅の趣味という事になるでしょう。

この中で一番ハードルが高かったのは「日本 300 名山西日本エリア 111 座踏破」でした。100 名山でも災害で登山口へのアクセスがままならず、1 年延長で達成という具合ですが、300 名山の中でも重複する 100 名山分はともかく、200 名山、300 名山に積み上げて選定された山には登山口へのアクセスは 100 名山に比較して悪い場合が多く、一番困るのは登山口や登山道も不明確な山もかなりある事でした。登山口へのアクセス林道の整備状態は 100 名山とは比較にならないほど悪いのが普通でした。この状況ですべて出発前の下見が出来れば、かなりの余裕を持てるのですが、遠隔地の山が殆どで下見を全部クリアできるはずもなく、山に車で出かけた折に時間を工夫し

て次回の山の登山口までの下見をしてみるとか、それもままならない九州のような遠隔地では地元の役場や観光協会、宿泊予定の宿、小屋、山岳協会などからの事前情報、出発直前情報が頼りでした。

その点、企画会社が行うツアーはそこまで自分で突っ込む必要は参加者にはないので、費用は倍から 5 割増し以上ですが気は楽です。ツアーに地図もコンパスも持たない女性参加者が多いのも、全て企画会社にお任せで「寝てるうちに登山口に到着して自分は登って下りるだけ、下山したらバスが待っており、すぐに休めて楽、ツアー以外ではほとんど山に行きません」という声も聞かれるご時世です。

私が、「日本 100 名山踏破」を急遽、決心して準備にかかった 2011 年 3 月時点では 100 名山の未踏はまだ 36 座あり、その達成を 2011 年中には完了の予定がままならず、豪雨災害や台風災害と沢の増水で途中撤退するなど 4 山が 2012 年に持越しとなった事情は先に記述の通りです。しかし、2012 年夏から秋にかけて意外にもあっけなく終わった残る 4 座を含めて、全体の 100 名山踏破の様子を以下に紹介します。



八甲田山頂上：100 名山（2009 年 10 月）

～小屋手前から雪が積もり頂上は凍てついていた。  
霧氷の様子が面白い～



富士山・剣ヶ峰頂上：100名山（2010年7月）  
～山茶蕎麦会企画に参加～



甲武信ヶ岳頂上・朝の富士山遠望：100名山（2011年6月）  
～富士山はもちろん、南ア、中ア、八ヶ岳、北アまでの展望があった。小屋の主人の話では年に数回しか無い程の好天との事～



南ア・鳳凰三山・地蔵岳頂上：100名山（2010年9月）  
～この登山が日本アルプスの100名山の最後の踏破になった～



火打山・高谷池付近：100名山（2011年8月）  
～この前日から雨飾を歩き、火打に続き妙高、高妻と連続で上越の100名山4座を登るといふ、前後泊入れて4泊5日の山旅となった。2泊した杉野沢の旅館田端屋は家庭的で印象的な対応ぶりだった～





日高・幌尻岳頂上：100名山（2012年8月）

～北海道の100名山では最後の山で、昨年7月初めのリベンジ登山。寒さ対策をしていたが道内は空前の暑さ。登山中に熱中症ぎみになり、水を頭にかけて冷やして何とか頑張った～

【100名山最後の登頂！】



皇海山（アミューズツアー）：100名山（2012年10月21日）

～ワングル現役時代は北アルプス・白山山系を主に活動し、仕事に就いてからは思うに任せなかった山行も、1998年春には再開、仕事フリーになってからは「日本100名山踏破」までスケールアップした山行きは、この皇海山で締めた～



## 私の「登山道」

15期 舟田 節子

「ワイン道」なる話を、金沢21世紀美術館で、フランソワ・ズ・モレシャンのおしゃれ講座の一環として聴きました。それは彼女の40年ぶりの帰国、3カ月にわたるボルドー滞在報告を兼ねたものでした。

金融、バ・チャル、グロ・バリズム、テクノロジーの時代に、それらの対極として再評価すべき「本物」とは？それは、明確な個性の大地に根ざし、雨と太陽と、働く人間の情熱によって得られた結果のワイン。さらにはそれを盛装して試飲するセレモニを含めて、「ワイン道」と考えるとのことでした。

彼女は何度も「私はプロのワイン評論家じゃないのヨ。ワイン評論家なら他にいっぱいいるからネ」と微笑みました。丁寧に作られた本物を大切に、衣服を改めて恵みを味わう...「そういった知性やメリハリを持つことが、本当の贅沢であり、おしゃれな生き方ではないか」という展開、すなわち「おしゃれ講座」なのでした。

ちなみに私はこの夏、スイストレッキングで、ワインとチ・ズ責めに閉口してきました。いわゆるハイキングではなく、オ・トル・ト（高い道）といって、シャモニ（モンブランの麓）からツェルマット（マッターホルンの麓）まで、11の谷と峠を越える180キロのル・ト（元々はスキ・ツア・コ・ス）のうち、ハイライト部分を歩き通す...という縦走登山ツアーでした。

まさにハイジの世界、あるいはサウンド・オブ・ミュ・ジックの世界。山岳観光地として美しく管理されぬいた景観を堪能して、ロッジにつけばワインを選びチ・ズと味わう（ポテトも）毎日...

ただ、何とも居心地が悪かったのです。そして今回も、彼女のお土産のボルドーワインと、こだわりの3種のチ・ズとパンの絶妙のハ・モニなるものが、私には???でした。

しかしながら彼女の話聞いて、あの時の違和感や「ワインの贅沢が分からない」の気持ち、それなりに正しいということは得心できたのです。

何より背景の文化が違います。そして「贅沢」よりは「ほどほど」、「おしゃれ」よりは「真っ

当に」...が自分の物差しであることも、はっきり分かりました。

またしても前置きが長くなりました（以上、前置きのつもり）。

これがどうつながっていくのかといえば、私はプロの登山家ではないけれど、「登山道」なるものを、論評してみても、そう大それたことではない、さして構えなければならないことでもない...と、そう思えたのです。すなわち「私の登山道」の検証です。

さて、この「登山道」の「道」とは、茶道、花道、剣道などの「道」をさします。修業して、究めていく「道」の方です。この間まで「山は遊び」と言っていたのに比べれば、かなりの昇格です。紆余曲折があっても続けてきて、これで稼ごう（むしろ散財）の欲をもたずに、長年の情熱を注いできたなら、「登山道」と言ってもよいのではないのでしょうか。

ちなみに名声欲をからめた活動や、あるいは命を賭けて...のような登攀を、世間は「プロの登山家」と言うのかもしれませんが、この場合の登山道には当てはまりません。まず、正業をもち、家庭人でもあること。社会の構成員として働き、次世代を育てる...これらが最優先です。これらを疎かにしての、山狂いや、山逃避はいただけません。マスコミのように囃し立て、誉めるわけにはいきません。



初登攀を始め、最年長や最年少、最短競争...。これらをつまる所、売名行為です。「人類に勇気や希望を与える」あるいは「日本は、冒険への理解がない」などの主張がなされるようですが、限りなく個人的な行為を、こんな言い方で切り替えるのは卑怯です。身勝手ともいえます。それがマスコミ流の物差しなのです。「目立てばいい」、「話題になればいい」の価値観です。

しかしながら、社会の一構成員であることや、一家庭人であることの方が、ありふれて目立たないけれど、確実に社会や未来に貢献しています。そう思わなければ、地道に生きる人は浮かばれません。いやいや、そんな表現をしなくても、そのように生きてきた人は、わが子の門出に立ち合う時、あるいは孫という未来を抱いた時、これまでの人生に花丸をつけられるに違いありません。

そういう人生のかたわらに常に山もあってくれた、喜怒哀楽のシ-ンの中に、山も重なっていた...それが私の考える「登山道」です。すなわち、自分が老境に入ったということなのでしょうね。

壮年の頃、仕事や子育てに忙しく、山に何らかの目標を求めるわけにはいきませんでした。年間50日を維持してはいましたが、気晴らしの次元でした。

しかし地元の山の調査仕事に関わって、比較的堅実に山知識を貯え、ガイドブック執筆の領域に至ることができました。一段落がついて、海外トレッキングや、百名山にも足を延ばせるようになりました。地球の宝といえる景色を自分の目で見たい、世間の評価を得た山を自分の尺度で確認したい...の夢を実現できました。

もちろん幸運でもありましたけれど、流されているだけなら実現するはずがありません。そのように願い、状況を周到に目標に傾けていったからこそ、実現できました。そんな自負はあります。そして今は、あらゆるご縁への感謝の気持ちが湧いています。

「終わりよければ全てよし」といいます。たとえば金メダルをとったり、横綱になったりという頂点を究めても、その後を台無しにしてしまう人達は多いようです。登り坂はそれなりに大変。しかし、否応なしに来る下り坂がどなたにも大変です。皮肉なことに、執念を燃やした人ほど、この下り坂は辛くなりそうなのです。そのあたりを庶民は「楽は下に有り」ともいいました。栄光とその後の落胆を均したら、案外みんなの「平凡」と一緒にかもしれないのが、人生の深淵です。

それらはさておき、体が資本の登山は、どう騙していても、はっきり下り坂に向かいます。今さらタイツを履いて、山ガ-ルをやるわけにもいかない私の考える「スマ-ト」や「ク-ル」は、この下り坂を、いかに、品よく、飄々と下るかにかかっています。それが出来ての「登山道」です。

しかし、これもまだまだ未熟な展開です。昨年6月に膝痛が出た時には真っ青になりました。筋肉痛のように4日目ぐらいにはずっと軽減という過程にならないことに、うろたえました。癌や脳梗塞やらの大病以外に、金属疲労というような体の軋みが出てくることを、「初めて」実感しました。こんな「初体験」を重ねながら老化していかねばならない...。そんな当然なことに、まだ気付いていませんでした。

結果、「もっと慎重に下ろう」にはならず、ますます「今のうち・・・」病に、拍車がかかった次第でした。悟ったように書いていても、この程度が、私の「登山道」です。まだまだ修行がいきそうです。ところが、ホップ・ステップ・ジャンプ式に、認知症の進んだ母をみると、また考え直しました。小賢しく心の準備をしても、詮無いことだと。

人間、なるようにしかなりません。どなたもが、「老いの道」を歩いて行くのです。

よろけても、惚けても、後には「私の登山道」が残っています。それはすぐ草に覆われて、その上を季節の風が吹きわたることでしょう。さて、今度の休みはどの山へ？





## ワングル入部 40 年、沖縄返還 40 年 大人の西表島PW(南海ばいかじ紀行)

17 期 小島 敬

2012 年は、金沢大学創基 150 年であると共に、金大ワングルに 17 期が入部して 40 年という記念すべき(?)年でした。4 月 29 日～30 日、『出会って 40 周年同期会 in 能登島』が、「ペンション WINDS」貸切で開催され、国内外から 16 名が集まりました。何故か 18 期も約 2 名参加。夕食後の話題で一番盛り上がったのは、「大鍋」の話。当時はキスリングに大鍋を載せて当たり前のように山へ出かけていました。でも、大鍋もキスリングも時代の流れと共にいつのまにか消えてしまいました。振り返ってみると、なんであんな馬鹿でかい鍋を持って行ったのだろう、いくつかのコッヘルで足りたのではないか、という意見が出て、みんなでああこうだと議論したのですが、結局納得性のある答えは出て来ず。持って行ったのは「大鍋がワングルのシンボル」だったから、というわかったようなわからないような結論になりました。大鍋も我々の青春と同様、しっかりとした意味づけもなく、訳の分からないままに過ぎ去っていったのですね。

2012 年は、沖縄返還 40 年の節目の年でもありました。私は、沖縄返還で熱帯ジャングルの西表島に行く機会が到来したことにまっ

たく思いが及ばず、学生時代はひたすら中部地方の山々を登っていました。返還後 40 年がたちますが、寡聞にして金大ワングルが西表島へ行ったという話は知りません。西表島の自然は日本本土とは(沖縄本島とも)大きく異なります。山あり沢ありジャングルありロードありの変化に富んだ大変魅力的な島です。サンゴ礁の海的美しさも格別です。独特な食文化も素晴らしい。3泊4日の“おとなの西表島PW”で西表の魅力をご紹介します。帰りに沖縄本島の首里城跡(旧琉球大学キャンパス)にも寄ります。若い現役諸氏にはぜひ西表島PWを出していただきたい。琉大ワングルや京大ワングルが西表島に出かけていますので、各HPもご覧ください。

### <12/29～1/1 おとなの西表島PW>

西表島(いりおもてじま):ケッペン気候区分は、Af(熱帯雨林気候)。八重山列島最大の島(面積 289 平方 km)で、淡路島の半分。島の面積の 9 割はジャングルで覆われ平地はほとんどない。海岸沿いに道路はあるが、島を一周できるものはない。最高峰は古見岳(469.5m)。特別天然記念物のイリオモテヤマネコなど珍しい動植物の宝庫。第二次世界大戦末期に波照間島などの住民が日本軍によって強制的に西表島(当時はマラリア発生地区)に疎開を命じられ、多くの住民がマラリアに罹り死亡した。



【12月29日】名古屋 石垣島

午後、直行便で石垣空港着。石垣港の一角にある離島ターミナル前のホテル・ミヤヒラにチェックイン。石垣港には第11管区海上保安本部石垣海上保安部が設置され、1000トン型巡視船「よなくに」「はてるま」や、巡視艇「なつづき」「あだん」などが配備されている。石垣唯一の繁華街美崎町の焼肉店『金牛』で夕食。ブランドの「石垣牛」が売り。石垣島・白保の自家牧場で育てた牛肉が味わえる。セットメニュー（カルビ、ロース、野菜）を注文。肉がとても柔らかい。落ち着ける店内で食も進んだ。

【12月30日】石垣島 西表島

朝風呂に入るため最上階から下りのエレベータに乗ると、出勤前の妙齢のスッチーと一緒に。キャビン・アテンダントというと5つ星ホテルのロビーを姿勢良く闊歩するイメージが強いが、最近はこのようなホテルにもお泊りになるのだろうか。などと考えているうちに1階へ着いてしまった。航空会社名も携帯の電話番号も聞くのを忘れたことに気づいたが後の祭り。

今日は、秘境・船浮（ふなうき）集落と奥西表の炭鉱跡・戦跡巡り。炭鉱跡は定期船の行かない無人島にあるので観光会社の探検ツアーに参加する。参加者は我々の他に定年後のご夫妻一組のみ。石垣島の離島ターミナルから西表島の東の玄関口、大原港へ渡る。迎いの観光バスは西表島の自動車道路の西端・白浜を目指し、海岸沿いを反時計回りにひた走る。仲間川 由布島 西表島温泉（日本最南端の温泉） 船浦湾（落差55mのピナイサーラ滝を遠望） 上原港 星砂の浜 浦内集落 星立集落 祖納集落。途中、特別天然記念物のカムリワシを見かける。白浜集落に着く前に東経123度45分6.789という子午線を抜ける。「子午線ふれあい館」が作られているが今回は子午線と触れ合う時間はなく、そのまま白浜で遊覧船「ちむどんどん号」に乗り換える。岐阜県各務ヶ原市出身の若いガイドが案内してくれる。陸生ホタルが乱舞する話、2メートルの大鰻が山を越えて移動する話、夏の夜のハブは半端な数ではないという話、モズクが手づかみで大量に取れるという話など、どこまで本当か分からないような話

も含めて、この若いガイドの西表への熱い想いは十分に伝わってきた。

〔探検コース〕白浜 内離（うちばなり）島 水落滝 船浮集落（旧日本軍の要塞跡見学） イダの浜往復 白浜。まず無人島の内離島に上陸し、炭鉱跡を見学。最盛期（1936年～37年）には1,400名の労働者が働き、年間12～13万トンの石炭を産出したとのこと。密林に埋もれたトロッコレールや共同風呂跡、廃坑などを見て回る。



内離島から船浮湾奥の水落滝へ。マングローブ林奥にある、海へ直接流れ落ちる滝だ。西表島には野生イノシシが多数棲息し、今は猟期。ちょうどマングローブ林の中からイノシシ猟を終えたオジイが小型ボートを漕ぎ出すところに出会った。しとめた獲物二頭を誇らしげに見せてくれた。「ちむどんどん号」は、岸壁に設けられた特攻艇基地跡に寄った後、船浮の港へ。周りの海は水深が深く天然の良港となっている。船浮は人口50名弱の集落。陸路では行けない秘境中の秘境だ。ブーゲンビリアやハイビスカスがさりげなく咲いている。この船浮の民家で、1974年に初めてイリオモテヤマネコが捕獲された。当時は鶏を捕りに来る悪いノラネコだったが、今やイリオモテヤマネコは西表島のシンボル。島おこしに絶大な貢献をしている。イリオモテヤマネコが発見されていなかったら、盛況の「やまねこタクシー」や「やまねこレンタカー」「民宿やまねこ」は存在すらしなかったし、毎年の「やまねこマラソン大会」も開催されていないわけで、まさにイリオモテヤマネコ様様。旧日本軍の要塞跡（弾薬庫、特攻艇基地、発電所など）を見学した後、村で唯一のレストラン『ふねっちゃ～ぬ家』で、定食「昔ごはん船浮三昧」をいただく。グルクンの唐揚げ、

紅芋の天ぷら、アーサ汁、パイアの和え物、マンゴーのゼリーなど、船浮の食材を使った食事を楽しむことができた。昼食後、村の反対側にあるイダの浜へ。徒歩で10分ほどだが、途中、カエルのたくさん棲む沼沢地のそばを通る。ガイドによれば、夏の夜は吃驚するほどの数のハブがいて、特にとぐろを巻いているハブは勢いよく飛び掛ってくるので、極めて危険だとのこと。「でも、冬はハブは出ないから大丈夫」と聞き一安心。

イダの浜からの帰り、「東郷平八郎上陸の地」という、半ば草花に埋もれた説明板があるのを見つけた。明治38年(1905年)日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を破った東郷平八郎は、駆逐艦で台湾、宮古、八重山に立ち寄り、船浮港にも独りで上陸した。船浮の学校を訪問後、立ち寄った民家でオバアからお茶とラッキョウの接待を受けた。大将はお礼の葉書をオバアに送った。字の読めないオバアに代わり葉書を読んだ学校長は、あの軍人が東郷大将であることを知ったという「大将とラッキョウの秘話」が説明板には書かれていた。蛇足ながら、NHK「坂の上の雲」のエンディングは、北アルプスの白馬大池から小蓮華岳への稜線(7月初旬撮影)。船浮で一番印象に残ったのは、海に入って、ずっと楽しそうに遊んでいる犬(黒のラブラドル)だった。水掻きがついているのではないかと思うほど海が大好きな様子だった。猫は水を嫌がるけど、イリオモテヤマネコは水中遊泳する。西表島では犬や猫にとっても海が生活の一部なのかもしれない。

探検ツアーから離れ、西表島北部の星砂の浜にあるペンション・コーラルガーデンにチェックイン。星砂の浜がプライベートビーチという最高のロケーションだ。散策の為、ペンション前の幹線道路に出る。なんと、ハブが車に轢かれて死んでいるではないか。しかも真新しい。冬なのにハブは出るのだ。『我瑠ダイニング・いるむていや』で夕食。星砂の浜入り口の高台にあるので眺めが良い。アダンの若芽の天ぷらがおいしかった。食事後、暗い夜道をハブに恐れおののきながらペンションに戻った。

## 【12月31日】西表島 石垣島

きょうは、沖縄県最大の川、浦内川(うらうちがわ)へ。9時30分発の遊覧船に乗る。長洲剛似の船長兼ガイドは、コワモテに合わぬやさしい語り口で両岸を覆うマングローブ林など動植物の解説をしてくれる。30分ほど遡上すると軍艦島と呼ばれる船着場に。ここから徒歩でカンビレーの滝へ向かう。登山靴を用意してきたので快適に歩ける。道はよく整備されていて不安はないが、オオタニワタリ、ヒカゲヘゴ、ハブカズラ、ツルアダンなどが生い茂るジャングルのトレールは、いつマタンゴが出てきてもおかしくない独特の雰囲気がある。船着場から45分でカンビレー(神々の座る場所)の滝に着いた。西表島で一番の聖地と言われている。ここから先に西表横断路が続くが、トレールを熟知したガイドについてもらった方が安全。浦内川の源流部から前良川の源流部に渡って南に向かい仲間川沿いの道路に出るルートがある。およそ12時間の行程だが、ハブや山ヒルヤサソリをまったく気にしなければ、快適なわくわくするジャングル・トレールが楽しめること間違いなし。今回はカンビレーの滝から引き返す。



「やまねこレンタカー」で車を借り、島の北の玄関口上原港へ。港近くの「デンサー食堂」で昼食。ここは女優中谷美紀お気に入りの八重山そばの店。都会のせわしなさが嫌になった時、西表島に来て必ず寄るのがこの店。お勧めの八重山そばをいただく。スープも麺もとても優しい味。店も暖かな雰囲気できつるげる。時計回りに島の南へ向かい、南風見田(はえみだ)の『忘勿石(わするないし)』〔注1〕へ。車を道路わきに止め、林の中をしばらく歩くと南風見田の浜に出た。波照間

の島影が遠望できる。『忘勿石』とは、波照間島の国民学校の識名校長が、強制移住地の南風見田を引き揚げる際、戦時中に児童を集め授業をした砂岩に、死者への鎮魂、恒久平和を祈り、「忘勿石 ハテルマ シキナ」と彫りこんだもの。(強制移住させられた波照間の全学童 323 名はマラリアの猖獗により全員罹患、内 66 名が死亡した。)車に戻る途中、浜でヤシガニの子供を見つけた。最初は普通のヤドカリと思ったが、10cm 近くと異様に大きく、凄みのある顔はとても普通のヤドカリではない。ヤシガニは陸上で生息する最大の甲殻類で、体長 40cm、体重 4kg に達し寿命は 50 年を超えるとされている。島の食堂ではヤシガニ・ラーメンやチャンプルーとして出されることもある。大原港で車を返し、西表島から石垣島へ戻る。夜は美崎町のオバアの店『やいま家庭料理さつき』にはいる。酔った漁師がカウンターでくだを巻いている。地元に愛されるなかなかいい店だ。モズク酢、ジーマーミ豆腐、八重山かまぼこ三種盛り、長命草豆腐和え、海ブドウサラダなど島料理を堪能する。メはブルーシールの紅芋アイス。店を出て、夏川りみのお母さんと姉妹のやってるスナック「花あかり」にも寄らずホテルへ戻り、部屋で紅白歌合戦を見て、日本最南端の除夜の鐘を聞きながら寝る。

#### 【1月1日】石垣島 那覇 名古屋

朝食は元旦らしく、ホテルで「長寿ゆし豆腐膳」をいただく。「お前百まで、わしゃいつまでも」(川喜多半泥子)。正月限定サービスの、琉装の美人とロビーで記念撮影した後、石垣空港へ。売店で地元新聞の元日版を買う。基地問題の扱いが本土メディアとは天地の差があるのに驚く。帰路は那覇経由。空港から、ゆいレールで終点「首里」駅へ。

首里城跡では正殿が見事に復元・整備され世界遺産に登録された。この首里城跡には、かつて(国立)琉球大学があり、1977年～1984年に城内から那覇市東方の西原町に移転した〔注2〕。以下は『琉大物語』より抜粋引用。首里城跡では1949年6月に大学本館、図書館、木造教室8棟の建設が始まり、翌1950年5月、琉球大学開校、563名入学。1951年1月に発布された米国民政府令第30号で、琉球大学の目的は次のように規定されている。「大学設立

の主要なる目的は男女学生に芸術、科学及びその他の専門職業に関する高等教育を施すことにある。また大学は琉球列島の成人に占領軍の政策に反せざる限り言論、集会、請願、宗教、出版の目的を含む民主国の自由を促進し、一般情報に関する事項を普及する」。大学本館は旧首里城正殿跡に建設されました。金沢城の本丸跡に大学本部を建てるようなものです。1960年頃には、文系ビル、教育ビル、理系ビル、農学ビル、工芸ビル、図書館、男子寮などの鉄筋コンクリートの建築物が建てられ、首里城跡は近代的な大学キャンパスに変貌していました。現在のキャンパスに移された『琉球大学建学の碑』にはこう記されています。「沖縄戦で灰燼に帰した首里城は、1166年から1879年まで、琉球王たちの居城であり、1477年から1526年の沖縄の黄金時代には壮麗な建物群が建立された。大学本館は、かつて玉座があった場所に位置している。」(原文は英語)。

米国民政府内では当初、首里城跡の利用方法についてさまざまな意見がありました。公園にして観光地化する案、行政府を城跡に持つてくる案、文化的な事業に使用する案などが検討されましたが、焦土と化した沖縄を復興させるのに必要なのは何よりも「教育の力」だとして、文化・行政の象徴だった首里城跡に琉球大学を建設することになりました。その後、郊外に大学が移転し、城跡が整備されたのは、琉球大学も金沢大学と同じです。

(注1)『忘れな石 沖縄・戦争マラリア碑』

(宮良 作(2006)：日本図書センター)

(注2)『琉大物語 1947-1972』(山里勝巳

(2010)：琉球新報社)



## 村田 泰恵さん（7期）が、 第86回国展（写真部門）に入賞されました！

【国立新美術館に飾られた受賞作品】



<村田さんからのコメント>

10年前、カメラ屋さんの「写真展に出して見たら」の言葉に乗せられて、一眼レフのカメラを買い、写真を撮るために「大日岳」を独りで縦走しました。その時撮った写真から、カメラ屋さんを選んでくれたものを、初めて石川県の「女流写真展」に出品しました。なんとこれが最高賞に輝き、あまりの棚ぼたで、その後4年程出品を続けました。一度も写真の勉強などしたことのない者にとって、そんなに甘い世界ではないことに気づき、ようやく写真教室で勉強することにしました。まだフィルムで、先生がいいと思う写真を先生が作り上げて出品するだけ、受賞するのは当たり前でした。でも、それは自分の作品ではなく、私はシャッターを押すだけの人だということに気が付きました。やがて、デジカメの時代が訪れ、購入したものの、特性がよく分からず、写真への興味も薄れていたところ、Photoshopとの出会いがあり、フィルムと縁を切ることになり、デジタルの世界に入って行きました。Photoshopが少しいじれるようになった去年、国画会のグループに入り、今年、初めて「国展」に出品することになり、初入選を果たしたわけです。2009年、ワングルの「野沢スキー」のゲレンデで撮った写真を、EPSON PX-5002のプリンターを購入して、自分でA2サイズの印刷をし、出品しました。「国立新美術館」に自分の写真が飾られているなんて、信じられない事件でした。せっかく、東京進出を果たしたので、もう少し前に進もうかと思い、これまでのノートPCをデスクトップに替え、モニターもEIZOのColour EdgeCX240にしました。これまでパソコンは使うのみで、分からないことはいつも人に聞いていましたが、今回は購入&セッティングを、仕事（65歳に大学を定年退職後、初めて薬剤師の世界に飛び込み、5年目）の合間に2ヶ月かかりましたが、一人でやり抜きました。何事もやれば出来ることが分かり、最近一番嬉しかったことです。今月、70歳になりましたが、もうしばらく仕事で資金調達をし、ゴルフで体力を維持し、いい写真を撮りたいと思っています。（7期 村田 泰恵）

# 大野 直子さん (21期) が、 「第22回日本詩人クラブ新人賞」を受賞されました！

【日本経済新聞 (2012. 7. 11) の記事】

ほくりく **ism**



## 父の闘病、詩で描き新人賞

詩人 大野直子さん

### 書く行為、自分さらけ出す

日本詩人クラブが主催する「第22回日本詩人クラブ新人賞」を受賞した金沢市住の大野直子さん。受賞作「化け野(ほけの)」には、金沢市出身の泉鏡花の小説を詞書(ことばがき)として使った詩も盛り込まれている。

「化け野」は4章で構成。詩を集めた。全体に通じるのは、自分や家族、環境は常が変わっていくという考えだ。

第1章は自らについて、第2章は怪奇幻想の世界を描いた泉鏡花の「高野聖」やカフカの「変身」などを引用しながら詩を展開する。「金沢に住んでいると、鏡花の小説の朗読会や芝居がさかんで、身近に感じていた」。第3章は母親、第4章は父親について書いた。

大野さんは「まるでヒーロー戦士」「カッコよすぎるじゃないか」と表現した。

病状についてあからさまな表現もあったため、新人賞受賞を聞いたとき「亡き父親への贖罪(しよくさい)になったのではないかと安堵したという。

大学を卒業し、小学校の教師をした後、地元出版社に勤務。その後、フリーライターとしてキャッチコピーや記事を執筆した。詩や小説などの講座がある大阪文学学校の通信教育を受講して添削を受け続けた。先生と生徒が作品について論評し合いながら、表現を研ぎ澄ませていった。

詩の魅力について大野さんは「作者の生き方や考え方が反映される」と話す。書くという行為により自分をさらけ出して表現することで「ストレスを発散していた」という。

読者によっては解釈が難しい詩もあるが「行間に込められた筆者の感情の変化を、自由に想像して読んでほしい」と願っている。

石川県出身、54歳

## <大野さんからのコメント>

図らずもいただいたこの日本詩人クラブ新人賞は、公募制ではないので、拙著『化け野』が同賞の候補作に選ばれましたとの連絡を受けた時は、はじめ何のことだかよく分かりませんでした。ましてや新人賞が決定した時はまさしく青天の霹靂。片田舎で鬱々と書いた詩集に光が当てられたこと自体、驚きであり、と同時に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

わたしは主人が仕事に出掛けると、自分の小さな部屋に籠もります(怠ける日も多いのですが…)。調子がいいと、スルスルとからだの奥底にある沼へ降りていくような気持ちになります。暗い湖面には生きることの可笑しみや哀しみがぼんやりと映り込んでいて…。そこは、大学二年の時に登った飯豊朝日の秘境・大鳥池だったり、霧のなかを歩いた白山の翠ヶ池だったりするのもかもしれません。寂しいけれど、心静かに自分と向き合える場所です。

そんなふうに考えると、わたしのもの書きは、ワングルの「落書き帳」から始まり、部活誌「ベルクハイム」で目覚めさせられたような気がします。山と、ワングルと、仲間たちに、そして家族に、感謝感謝です。ありがとうございました。(21期 大野 直子)

## ～ 現役生のページ ～

現役が、今年の夏合宿の報告をやまざとに送ってくれました。今年は天気に恵まれたようで、どのパーティーの写真も素晴らしい画像となっています。

現在、現役部員は、1年生が13名、2年生が14名在籍しているそうです。一昔以上昔に戻ったかのような部員数に思わず嬉しくなっていました。(by 事務局)

### 1. 八ヶ岳パーティー (8月4日～9日)

#### 夏合宿 (八ヶ岳)

56期 中谷 沙織

8月の上旬に八ヶ岳を6日間かけて、赤岳から蓼科山まで北上しました。私にとって初めての夏合宿で、私の経験の中で一番長いものでした。今までより、全体の行程の長さも、日数も長かったため、達成感も感動も大きかったです。行く前は期待と不安が入り交ざっていましたが、とてもいい経験をすることができました。天候に恵まれ、山からの景色はとてもきれいでした。最終日に登った蓼科山からの景色は、一番心に残っています。青空のなか、今まで登ってきた山を眺めることができ、達成感と感動と夏合宿が終わりに近づいているさみしさでなんとも言えない気持ちになりました。その日の行程が終わった後に、みんなでトランプをして盛り上がったこともいい思い出です。初めは長いと思っていた夏合宿も、終わるときには、終わってほしくないと思いました。景色がきれいで、多くの山を眺めることができたので、もっと多くの山に登りたいという気持ちが強くなりました。大切な思い出ができ、この経験をできたこと、そして一緒に登ってきたメンバーに感謝しています。

#### 夏合宿の思い出

55期 吉田 英優

僕は今年の夏合宿でリーダーを務め、八ヶ岳の登山計画を行いました。

今まで、山までの移動やどのように登山をするかといった山行計画をほとんど立てた

ことがなかったため、最初はどうしていいかが分からず、安全に後輩を山に連れていけるか心配でした。

しかし、同回生にアドバイスをもらったり、頼れる後輩にサポートしてもらったりして、何とか八ヶ岳山行が実現しました。

パーティーメンバー全員が今回初めて八ヶ岳に登りましたが、事前に危険箇所を皆で把握し、無理のない行動時間になるように計画できていたので快適な山行となりました。天気も一日を除いて快晴で、南北に連なる八ヶ岳を毎日少しずつ違う位置から眺めるという貴重で贅沢な経験ができました。

今回は自分でも満足できる登山にすることができたと思っていますが、ワンゲル部員のサポートと慎重な登山計画がなければ上手くいかなかったと考えています。今後、登山をする際にも助け合いと事前の情報収集を念頭に置いて山を楽しんでいきたいです。







## 2. 東北パーティー (8月4日～9日)

### 初めての夏合宿

57期 石川 千尋

私は、金沢大学ワンダーフォーゲル部に入学するまで登山の経験がなかったため、約1週間の夏山縦走はもちろん楽しみでしたが、同時に精神的にも体力的にも不安な面がありました。パーティーが決定してからトレーニング山行を数回行いましたが、その不安は拭えませんでした。期待と不安を抱きながら実際に夏合宿がスタートし、東北の朝日連峰を登山しましたが、やはり不安は現実となり体力的につらく感じる場面もありました。しかし、稜線から一望できる景色と先輩方のアドバイスのおかげで何とか行程を乗り切ることができ、感無量でした。

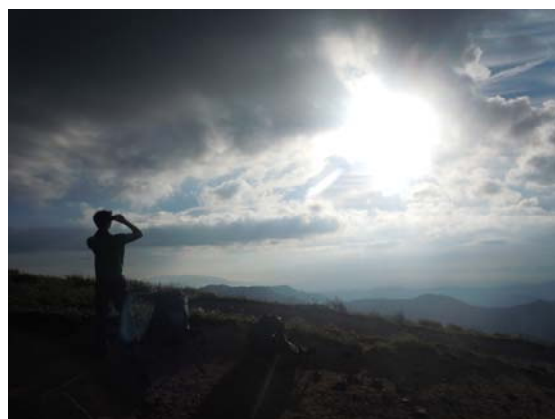
初めての夏合宿を通して、立っただけで別世界にいるかのような気分になれる山の魅力を感じました。自分の足で登山したことや何か不思議に感じつつ、その達成感と景色には言葉に言い表せないものがありました。そして、約1週間を通して同じメンバーで行動することで学ぶことも多くありました。まず、自分の軽率な行動が他のパーティーメンバーに非常に迷惑をかけるということを実感しました。そして当然のことですが、体調が優れないメンバーの荷物を他のメンバーで持ち合うといったお互いの協力が、行程をこなす上で必要不可欠ということも感じました。今年は一回生として先輩方に頼ってしまう場面が多く、登山では付いていくのに必死でした。そのため、来年は今回の夏合宿で学んだことを生かして、より成長して、たくさんの山に登りたいです。

## 2年目の夏合宿

56期 酒井 浩人

僕は、朝日・飯豊連峰の夏合宿に参加しました。今回は、自分が2年生で後輩もいるということで、しっかりしないといけないと思ってむかえた夏合宿でした。しかし、その意気込みとは裏腹に、2日目、以東小屋にあと1時間で着くというところで、日ごろの運動不足もあって、足をつってしまいました。かなり重症で、しばらく立ち上がることもできず、パーティーメンバーに迷惑をかけてしまいました。このようなつらいこともありましたが、楽しいことももちろんありました。

今回登った山の標高は、アルプスと比べて低いですが、稜線に出たときのあの絶景は、アルプスの景色と勝るとも劣らないほどで、歩いていても楽しかったです。さらに、東北に行き感じたことは、現地の人々がみんな親切だったということです。急遽泊まることになった竜門小屋では、無線でジャンボタクシー会社と連絡をとってもらったり、天狗平ロッジでは、管理人さんとその方の知り合いの人から焼肉やお酒のおすそ分けをもらったりしました。見ず知らずの僕たちにここまでしてくれる、心の温かさに感動しました。





### 3. 後立山パーティー (8月7日～12日)

#### Gotate Party!

57期 池田 勇馬

今回、光栄なことに「やまざと」に寄せる原稿を依頼されました。そこで、少しではありますが、最も思い出に残った登山について書かせていただきます。

タイトルにある「Gotate」とは、今年僕が行った後立山連峰のことです。パーティーはタフな男子6名で構成されており、後立山もそれに見合ったハイレベルな山でした。しかし、僕はこの合宿に臨むにあたって大きな不安を抱いていました。それは、僕が高所恐怖症だということでした。一回生の中でも、とりわけ高所に弱い僕がこのパーティーに決まった時は不安で仕方ありませんでした。いざ本番が始まり、4日目で難関である岩場に差し掛かったとき、恐怖で何度も足が竦みました。何度も逃げ出したいと思いましたが、リーダーはじめメンバーの力強い支えによって無事乗り切ることができました。不思議なことに、合宿を終えると高所への恐怖が嘘のように克服されたのです。この登山で、苦手なことに挑戦することの大切さを学びました。これからも様々な登山に挑戦したいと思います。

#### 八峰キレットで見つけたもの

55期 坂田 有輝

僕たちのパーティーは、8月の上旬に蓮華温泉から白馬岳を登り、一度罫温泉側から下山して八方尾根を上がり、唐松岳、そこから五竜、鹿島槍と縦走し、種池山荘から扇沢へ

と下山しました。今回、不帰キレットは1年生のスキルの関係からカットしました。しかし、八峰キレットは避けては通れず、また危険な道を安全に通る練習も兼ねて通ることにしました。

部室に残された先輩方の記録、いくつかの書物、Web上で見られる一般の登山者の方の写真であらかじめ、八峰キレットがどの様に危険なのかは確認してはいました。しかし、私はパーティーのリーダーの立場にあり、自分にとって大丈夫だと思っていなくても、まだ経験の少ない1年生が無事に通れるかどうか、山行が近づくにつれ大きくなる不安を人知れず感じていました。

八峰キレットを通過する山行4日目、これまで写真やイメージでしか見ることはなかったキレットを目の当たりにしました。僕が1,2年生の時の夏合宿では感じたことのない不安、危険がすぐ近くに存在することの怖さを感じ、パーティーメンバー全員が無事に渡りきれるようにと祈らざるほかありませんでした。「ここは慎重に」、「こっちの方が安全だよ」といった2年生から1年生への声かけもあり、全員無事に八峰キレットを渡りきることができました。メンバーの中には恐怖だけでなく、岩場を通ることの楽しさを見出したメンバーもあり、後輩たちには単なる恐怖体験にはならなかったことも合わせ、下山したときには大きな安堵感を覚えました。

登山は危険が付き物、安全な山など存在せず、どんな低山であっても気を抜いてはならない、ということを僕は常に心がけるようにしています。しかし、気を抜かないとはどういうことなのか、夏合宿が終わるまでははっきりとした答えはわかりませんでした。後立山、特にキレットで感じた恐怖と、それを乗り越えようとする気持ちこそが自分自身に常に山での安全を意識させることになる、それが夏合宿を終えた今は答えなんだと感じています。



#### 4. 南アパーティー (8月18日～25日)

### 初夏合宿!!

57期 笠原 朋与

今まで生きてきて7泊8日も山の中で過ごしたことなくなかったので、正直行く前は不安が大きかったです。体力的に大変なこともありましたが、先輩方に助けをもらいながら、広大な景色に励まされながら、無事南アルプス縦走を果たすことができとても嬉しいです。8日間天候に恵まれたため下界では

見ることのできない素晴らしい景色の数々を見られたことが幸せでした。午前3時に出発した日に見た上空360度の星空や仙丈ヶ岳で見たご来光に感動し、数日かけて自分が歩いてきた山の稜線の連なりが見えた時には感慨深いものがありました。

楽しいメンバーと南アルプスの山々の美しさでこの夏一番の思い出ができたと思っています！

### 南アルプスの思い出

55期 丹羽 りさ

私は、2012年の夏合宿で南アルプスを縦走しました。前年にもほぼ同じ山域を訪れており、人生2度目の南アルプスをとても楽しみにしていました。しかしその反面、最上回生として夏合宿に参加するという事で緊張もありました。山行2日目に登頂した地蔵岳では、オベリスクという屹立した岩石に圧倒されました。私は一番上までいけなかったのですが、パーティーメンバーの2人はその頂上まで辿りついていました。5日目には仙丈ヶ岳の山頂からご来光を見ました。東の空がだんだん明るくなり、太陽が顔を出し、光が広がって行くダイナミックな景色にとっても感動しました。また、仙丈ヶ岳から稜線歩きをしたのもいい思い出です。天気がとても良かったので、それまでに登った甲斐駒ヶ岳や仙丈ヶ岳、これから登る北岳などを全て見渡すことができ、とても爽快でした。

7日間の山行を無事に終えることが出来たのは、パーティーメンバーのおかげだと思います。個性豊かなメンバーで、笑いの絶えない楽しい山行でした。これからもいろいろな山にチャレンジしていきたいです。



## 5. 北アパーティー (8月18日～23日)

### 北アルプス

56期 愛宕 将希

2度目となる夏合宿を終えて、2日目の午後に雨が降った以外は、全て晴れていたため、北アルプスの素晴らしい景色を楽しむことができ、本当によかったと思う。山頂からの景色はもちろん、稜線部分も素晴らしかった。体力的にも昨年に比べると、余裕を持って山行に取り組むことができたと思う。今回は二回生ということで、一回生に指導をしていかなければならない立場であったが、細かいところでそれを行うことができず、反省しなければならなかった。

2日目は、北アルプス三大急登の一つでもあるブナ立尾根の登りはつらく、また天候悪

化により烏帽子岳には登らなかった。そして3日目も行動時間が長く、アップダウンもありつらかった。この3日目では水晶小屋に到着し、予定では水晶岳に向かうはずだったが、カットすることとなった。5日目は怪我人が発生したことにより、薬師岳から越中沢岳へ向かう行程をカットし一旦下山し、立山へ向かうことになった。次回機会があればこのカットした行程を登れればと思う。

2012年11月発行の金大の広報誌「Acanthus (アカンサス)」No. 24のサークル紹介のページに、ワンゲルの記事を見つけました。(by 事務局)

## Circle サークル紹介 introduction

仲間と過ごす時間は、  
未来へ続くネットワーク。  
金沢大学学生支援サイト サークル活動  
<http://ghp.adm.kanazawa-u.ac.jp/archives/12.html>



部室には参加者を募る登山計画書が何枚も張られている。自主性を大切に、好きな山に登る。ワンダーフォーゲルは自然を相手にする活動全般を指すが、金沢大学ワンダーフォーゲル部は登山だけを対象にしている。活動範囲は北海道から屋久島までと広く、夏は日本アルプスや八ヶ岳に1週間以上、冬は近場の山で1、2泊する。6、7人でパーティーを組み、荷物を持ち合ったり、同じテントに寝泊まりする



精密な計画が安全を支える

一歩一歩、頂上をめざす  
ワンダーフォーゲル部

ワンダーフォーゲル部の活躍はここで！  
<http://kuwv.yamanoha.com/>

ピッケル

同じ山に何度登っても、人それぞれ必ず新たな発見があるという。登る目的はさまざまでも、彼らの志は山のように高く、絆は岩のように固く一つに結ばれているに違いない。

この夏、「東北の被災地を元気づけるために、自分たちが元気でいよう」という被災地応援プロジェクトに協力し、100人の参加者と一緒に白山の頂で復興を祈った。「大人数で登る一体感は、普段は味わえない」と部長の坂田有輝さん(経済学類3年)は継続を願う。

と自ずと心が通じ合うという。山の知識は先輩から後輩に伝授する。登山計画は2年生以上が立てる決まりで、顧問の先生にも必ず点検してもらおう。棚にずらりと並ぶ資料は、「楽しく安全に」の証でもある。OBとのつながりも強く、毎年、金沢市南部の高三郎山にある部の山小屋を共に整備して親交を深め、一緒に山に登ることも。参考図書を寄贈してくれる先輩もいる。

# K U W V O B 会 会計報告

( 2 0 1 1 年 1 2 月 1 日 ~ 2 0 1 2 年 1 1 月 3 0 日 )

## 【 収 入 の 部 】

OB会費納入	40,000
寄付	62,000
預金利息	202
計	102,202

## 【 支 出 の 部 】

OB会報(やまざと)No.26 作成費	197,400
OB会報(やまざと)No.26 郵送費	37,333
役員会議費	1,065
事務用品費	6,285
振込手数料	2,205
計	244,288

## 【 差 引 剰 余 金 】

前回(2011.11.30)繰越金	1,507,715
収 入 の 部	102,202
支 出 の 部	244,288
差 引 剰 余 金	1,365,629

### 山小屋酒場 2012

( 今年 の 林 道 状 況 に つ い て )

20 期 久 富 象 二

犀川ダムまでの県道、倉谷・土清水線は昨年と同様に、5月以降も崖崩れ防止工事のため通行止めが解除されず、春の小屋酒場は中止せざるをえませんでした。

5月下旬の日曜に、工事の様子を見ようとしてダムまで一人で歩いてみました。4~5か所に土砂などをせき止める土嚢が道端に並べてありましたが、ダムまでは難なく歩くことができました。その後県道は工事が終了し、8月下旬に2週間程度供用されたようですが、再び崖崩れ防止工事と舗装工事のため、11月末まで通行止めとなりました。

夏の暑さが和らいだらベルクハイムへ行って、せめて風を通して掃除でもしてこようと思っておりましたが、秋の長雨と休日に仕事が続いたことからなかなか都合がつかず、また同行してくれる方とも調整がつかず(一人ではとても。熊が怖い!)行けないままになっています。

県道だけでなく、ベルクハイムの手前、水位観測所のあたりの斜面の崩れ具合が気になっています。かつてのように簡単には行けない状況にあると推測しています。

鍵を借りて寺津発電所の通行止めのゲートを開けることは可能ですが、OB会の行事で崖崩れの危険のある県道を歩いてもらうわけにはいきません。当面は県道の復旧状況を、こまめに把握していくしかないと思っています。

## 編集後記（事務局から）～

OB会会報「やまざと」vol.27 も原稿を送っていただいた方々をはじめとした皆様のご協力のもと、何とか年末発行にこぎつけることが出来ました。原稿をお寄せいただいた方々には改めて感謝申し上げます。

今年は近畿支部、関東支部に続くOB会3つ目の支部として東海支部が正式に設立されました。早速PWが出されるなど、愛知県在住の方々を中心に活動されています。支部に比べて本部の方は、犀川ダムに通ずる道路が通行止めのままで、小屋作業も思い通りに出来ないなど、なかなか活発とは言えない状況です。事務局としては申し訳なく思っているところです。

今年の「やまざと」では、この他、村田さん(7期)と大野さん(21期)の写真と詩が賞に入選したお知らせを掲載しました。村田さんの写真や大野さんの詩は当然すばらしい作品ですが、今回「やまざと」にいただいたご本人からのコメントも素晴らしく、元気をもらえたような気がしました。

また、別紙のお知らせにありますように、来年(2013年)は創部55周年の節目の年にあたります。9月に総会・懇親会を開催いたしますので、今からスケジュールを空けておいて頂きますようよろしくお願いいたします。(詳細の案内は、後日もう一度お知らせします。)

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会 会報誌「やまざと」vol.27

発行日 2012年12月

発行者 久富 象二(OB会会長・20期) E-mail chmxm643@ybb.ne.jp

編集・印刷 デザイン・プリーズ

OB会事務局 〒920-0831 金沢市東山3-19-4 鳥越 伸博(23期) TEL(090)8965-2838

E-mail(PC) tori3512@ybb.ne.jp (携帯) n-toripapa.860510@docomo.ne.jp

OB会ホームページ：<http://www.kuwv.net> 管理人/奥名 正啓(15期)

OB会費払込口座(口座名義：金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会)

郵便局(通常払込) 00780-3-14120

ゆうちょ銀行〇七九支店 当座預金 No.0014120

北國銀行本店 普通預金 No.223703

- ・OB会は皆様のOB会費で運営しております。OB会の趣旨にご賛同いただける方で、会費納入をお忘れの方は、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。(ご自分の状況をお知りになりたい方は、上記OB会事務局鳥越までe-mail等でお問い合わせください)
- ・住所が変わられた方は、お手数でも事務局までお知らせいただくと幸いです。
- ・奥名さんから定期的にeメールでOB会通信を配信していただいております。配信をご希望される方はご自分のメールアドレスを奥名さんまでお知らせください。

奥名さんのメールアドレスは [ma-okuna@nature.email.ne.jp](mailto:ma-okuna@nature.email.ne.jp) です。